

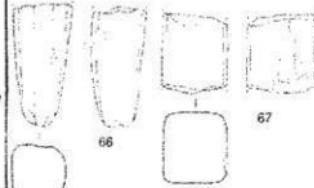
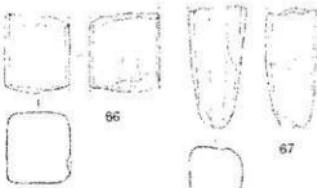
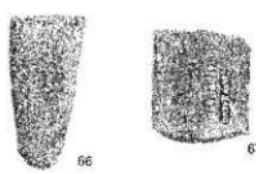
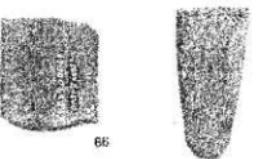
吉武遺跡群 21

—金武圃場整備事業に伴う吉武遺跡群第14次調査報告、大北遺跡第1次調査報告—

2008

福岡市教育委員会

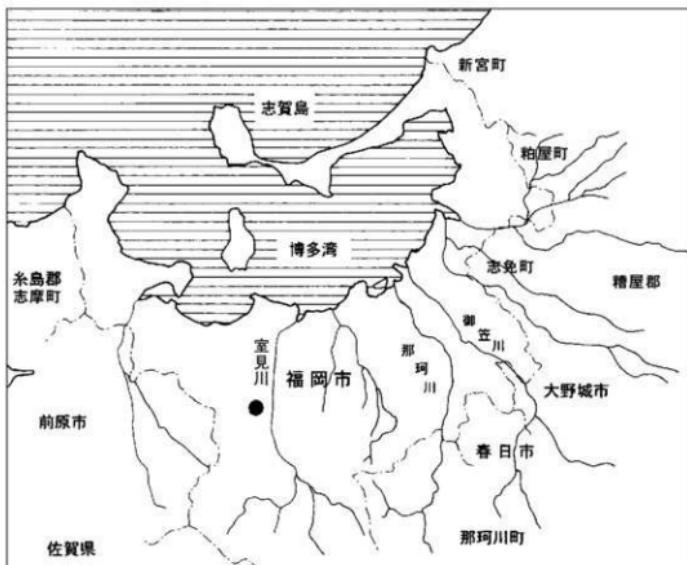
「吉武遺跡群21」報告書正誤表 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1017集

頁	行	誤	正
29	4	163~168は土師器	163~167は土師器
53	図37		
66	写真 52		

NE. 34.7402

よしたけいせきぐん
吉武遺跡群 21

—金武圓場整備場に伴う吉武遺跡群第14次調査、大北遺跡第1次調査の記録—



	調査番号	遺跡略号
吉武遺跡群第14次調査	8838	YST-14
大北遺跡群第1次調査	8827	OKT-1

2008

福岡市教育委員会

序

海に開かれたアジアの交流拠点都市づくりを目指す福岡市は、古来より大陸文化の受入口として繁栄してきた地域で、市内には貴重な文化遺産が数多く残されています。

福岡市の西部に位置する西区は、地下鉄空港線、筑肥線、福岡都市高速道路、外環状道路、地下鉄七隈線などの交通基盤の整備によって、沿線を中心に都市化が急速に進んでいますが、周辺部はまだまだ緑豊かな自然が残り、都市近郊農業などが盛んに行なわれている地域もあります。また西区には国史跡の野方遺跡・吉武高木遺跡・今宿古墳群・元寇防塁などを含む遺跡が数多く分布しています。

本書は、昭和63年度に金武第2土地改良事業に伴って発掘調査を実施した、吉武遺跡群第14次調査と大北遺跡第1次調査の報告です。調査では弥生時代から中世にかけての集落跡を検出しました。特に大北遺跡は初めての調査で、遺跡の一端を知ることができました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動においても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、福岡市農林水産局や土地改良組合の皆様など、関係各位のご協力に対しても、厚く感謝の意を表します。

平成20年3月17日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が昭和 63 年度に金武地区第 2 土地改良事業に伴い、福岡市経済農林水産局農業土木課からの令達事業と国庫補助金を受けて発掘調査を実施した、吉武遺跡群第 14 次調査と大北遺跡群第 1 次調査の発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は上記の主体により行われ、調査は山崎龍雄が担当して行なった。
- (3) 本書の遺構記号は福岡市の遺構記号に準拠して、SA（柵）、SB（掘立柱建物）、SC（竪穴住居跡）、SD（溝状遺構）、SK（土坑）、SP（柱穴・ピット）、SX（不明遺構・その他の遺構）としている。
- (4) 遺構実測と遺物の実測は山崎が行なった。
- (5) 本書に使用した図面の浄書は山崎が行なった。
- (6) 遺構・出土遺物の撮影は山崎が行なった。
- (7) 本書に使用した方位は磁北であり、真北とは $6^{\circ} 18'$ 西偏する。
- (8) 吉武遺跡群 14 次調査の土器群・包含層・遺構面出土の土器の法量については、紙面の都合から実測図右横に数値を記載している。
- Ⓐ: 口径 Ⓑ: 底径 Ⓒ: 残存器高 (数字) は復元数値
- (9) 報告書シリーズ書名については吉武遺跡群名を踏襲したが、本報告書のシリーズ番号 21 はローマ数字での表記が煩雑になるため、本報告書ではアラビア（算用）数字とした。
- (10) 本文土層や土器の色調については、新版標準土色帖によっている。
- (11) 本文で使用した貿易陶磁の分類は、すべて「博多出土貿易陶磁分類表」の基準によっている。
- (12) 図 2 で使用した地図は旧地形を表現するために、「福岡市文化財分布地図（西部 I 都地 93）」（昭和 54 年 3 月作成）を使用しており、現在の遺跡範囲とは異なっている。
- (13) 調査に係る記録類・出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。
- (14) 本書の執筆・編集は山崎が行なった。

吉武遺跡群第 14 次調査の概要

遺跡略号	調査番号	調査地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当
YST-14	8838	福岡市西区大字吉武字高木	17.8ha	724 m ²	圃場整備	1988.7.25 ~ 88.9.16	山崎龍雄

大北遺跡群第 1 次調査の概要

遺跡略号	調査番号	調査地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当
OKT-1	8827	福岡市西区大字金武字大北	17.8ha	470 m ²	圃場整備	1988.7.25 ~ 88.9.16	山崎龍雄

本文目次

本文頁

第Ⅰ章 はじめに	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境	2
1 立地	2
2 歴史的環境	2
第Ⅲ章 吉武遺跡群第14次調査	4
1 調査の概要	4
2 遺構と遺物	5
第Ⅳ章 大北遺跡群第1次調査	43
1 調査の概要	43
2 遺構と遺物	43
第V章まとめ	56

挿図目次

図1 吉武遺跡群・大北遺跡群周辺遺跡(1/50,000)…3	
図2 調査地点位置図(1/5,000)…4	
図3 SA01・02(1/80) ……5	
図4 SB01～04・06(1/80) ……6	
図5 調査区遺構全体図(1/200) ……折り込み	
図6 SB05, SD04(1/80) ……7	
図7 各建物出土土器(1/2・1/4) ……8	
図8 SC01・02(1/60) ……9	
図9 壊穴住居跡出土土器(1/4) ……10	
図10 SK01・05～07・10(1/40) ……11	
図11 SK06・09・10出土土器(1/4) ……12	
図12 SK10出土土器②(1/3・1/4) ……13	
図13 SK10出土土器③・SX03出土土器(1/4)…14	
図14 各遺構出土石器(2/3・1/2・1/3) ……15	
図15 SX06(1/20) ……16	
図16 ピット出土土器①(1/4) ……17	
図17 ピット出土土器②(1/3・1/4) ……18	
図18 谷部下層遺構状況(1/60・1/120)…19	
図19 土器群出土土器①(1/4) ……22	
図21 包含層出土土器②(1/4)…24	24
図22 包含層出土土器③(1/3・1/4)…25	25
図23 包含層出土土器④(1/4)…26	26
図24 包含層出土土器⑤(1/4)…27	27
図25 遺構面出土土器(1/4)…28	28
図26 各遺構出土石器(2/3・1/2・1/3)…29	29
図27 調査区遺構全体図(1/200)…44	44
図28 SD02～04、調査区段落ち部 南東壁土層(140・1/60・1/80)…45	45
図29 各溝出土土器(1/3)…46	46
図30 SK01・03・04・07・10(1/30)…47	47
図31 SK01・03出土土器(1/3・1/4)…48	48
図32 SK07出土土器(1/3・1/4)…49	49
図33 SK11・12(1/30)…50	50
図34 SK11出土土器(1/3・1/4)…51	51
図35 ピット出土土器(1/3・1/4)…52	52
図36 段落ち部出土土器(1/3・1/4)…52	52
図37 遺構面出土土器(1/4・1/3)…53	53
図38 各遺構出土石器(1/3)…54	54

写 真 目 次

写真1 調査区遠景(東から).....	32	写真27 大北遺跡遠景(北東から).....	57
写真2 調査区全景(東から).....	33	写真28 第1次調査区全景(北東から).....	57
写真3 調査区全景(東から).....	33	写真29 調査区北側(東から).....	58
写真4 SB01～03, SC01, SD02(東から).....	34	写真30 調査区南側(東から).....	58
写真5 SA01・02, SB05, SD04(北から).....	34	写真31 SD05(東から).....	59
写真6 SB01(北から).....	35	写真32 SD06(東から).....	59
写真7 SB01柱穴SP35で検出した柱根.....	35	写真33 SD01(東から).....	60
写真8 SB02(北から).....	35	写真34 SD03(北西から).....	60
写真9 SB03(北西から).....	35	写真35 SD04鉄滓出土状況(西から).....	60
写真10 SB04(北から).....	35	写真36 SD05礫石検出状況.....	60
写真11 SB06(北から).....	35	写真37 SK01(北西から).....	61
写真12 SB05とSD04(北から).....	36	写真38 同 遺物出土状況.....	61
写真13 SC01(北から).....	36	写真39 SK03礫検出状況(北から).....	61
写真14 SC02(北から).....	36	写真40 同 完掘(北から).....	61
写真15 SK05(東から).....	37	写真41 同 遺物出土状況.....	61
写真16 SK06(西から).....	37	写真42 SK07(東から).....	62
写真17 SK07(東から).....	37	写真43 SK04(北から).....	62
写真18 SK10(北から).....	37	写真44 SK07遺物出土状況(北から).....	62
写真19 鉄滓ピットSX06(北から).....	37	写真45 SK11(西から).....	63
写真20 包含層(整地土)西側掘り下げ状況 (東から).....	38	写真46 同 遺物出土状況①.....	63
写真21 土器群検出状況(北から).....	38	写真47 同 遺物出土状況②.....	63
写真22 包含層(整地土)掘り下げ状況 (東から).....	39	写真48 SP17遺物出土状況.....	63
写真23 包含層土層状況(東から).....	39	写真49 調査区段落ち部南東壁土層(西から).....	64
写真24 各遺構出土遺物①(縮尺不統一).....	40	写真50 20年後の調査区の状況(東から).....	64
写真25 各遺構出土遺物②(縮尺不統一).....	41	写真51 各遺構出土遺物①(縮尺不統一).....	65
写真26 各遺構出土遺物③(縮尺不統一).....	42	写真52 各遺構出土遺物②(縮尺不統一).....	66

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

今回の調査は事前審査番号 63-1-522 で経済農林水産局農業土木課から提出された「金武第2土地改良事業」計画によるものである。この土地改良事業は昭和60年度から総工事計画面積 17.8ha で行なわれたもので、昭和63年度事業予定地内に吉武遺跡群、大北遺跡群の一部が含まれるため、昭和63年3月2・3両日に事前の試掘調査を行ない、遺跡を確認した。その遺跡の取り扱いについて、埋蔵文化財課（当時）は申請者の農業土木課と協議を行ない、工事で遺跡の消滅が避けられない道路・水路部分などについて、記録保存のための発掘調査を昭和63年度に行なう事になった。発掘調査費用は農業土木課からの令達と、農家負担分については国庫補助金を受けている。発掘調査は昭和63年7月25日から9月16日迄実施した。

調査にあたっては事業主体の福岡市金武第2土地改良区や経済農林水産局農業土木課、また地元の皆様から多大な協力を受けた。ここに記して感謝の意を表したい。

2. 調査の組織

昭和63年度調査、平成19年度整理関係者は以下の通りである。

【昭和63年度調査】

調査委託	経済農林水産局農業土木課、福岡市金武第2土地改良区
調査主体	福岡市教育委員会教育長 佐藤善郎
調査総括	文化課長 柳田純孝
調査庶務	同課 埋蔵文化財第2係長 飛高憲雄 同課 埋蔵文化財第1係 岸田 隆
調査担当	発掘調査担当 埋蔵文化財課第2係 山崎龍雄
試掘担当	同課第1係 米倉秀紀
調査作業員	青柳フミ子、伊藤みどり、井本綾子、井上絹子、井上紀世子、岩崎精一朗、大内文恵、 金子由利子、清原ユリ子、金子ヨシ子、神尾順次、倉光ヨシ子、黒木千佳子、 坂口フミ子、白坂フサヨ、正崎由須子、懇慶とみ子、十河尚彦、田代謙一郎、 典略初栄、徳永ノブヨ、西尾タツヨ、原田圭助、細川ミサヲ、堀川ヒロ子、 松井フユ子、門司弘子、山西人美、萬 斯ミヨ

【平成19年度整理】

総括	埋蔵文化財第2課長 力武卓治
庶務	埋蔵文化財第2課調査第1係長 杉山富雄
	文化財管理課管理係 井上幸子
整理担当	埋蔵文化財第2課主任文化財主事 山崎龍雄
整理作業員	井上朝美、木藤直子、増永好美、村上信子

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 立 地

今回の調査地が所在する吉武遺跡群と大北遺跡群は、福岡市の西部にある早良平野を南北に貫流して博多湾に注ぐ室見川中流の左岸、背振山から北に伸びる山塊の西山（430m）・飯盛山（382m）の東麓に形成された台地（扇状地）上に立地する。この台地は日向川や竜谷川など室見川の支流による開析谷が入り、それぞれが上流から下流へと帯状を呈している。吉武遺跡群と大北遺跡群は浅い谷を挟んだ別の台地上に立地する遺跡である。今回の調査地点は吉武遺跡群の南端と大北遺跡群の北端に所在し、両地点の距離は約50mを測る位置にある。

2. 歴史的環境（図1・2）

吉武遺跡群・大北遺跡群が所在する室見川流域では後期旧石器時代から遺跡が確認されている。後期旧石器時代については、室見川下流右岸の阿蘇火碎流で形成された独立丘陵上に立地する有田遺跡群などがある。吉武遺跡群でも第9次調査区でナイフ形石器などを含む遺物包含層が確認されている。

縄文時代の遺跡は下流から沿岸砂丘部を除いた、室見川中・上流域の扇状地から周辺丘陵部を中心には分布している。早良平野最奥部には縄文時代早期の包含層や遺構を検出した松木田遺跡があり、対岸の扇状地上に立地する田村遺跡、四箇遺跡群では縄文時代後期の集落や、湿地層が調査されている。また吉武遺跡群でも第2次調査で、縄文時代中期～後期の貯蔵穴群を調査している。また特筆すべきこととして、海岸砂丘部の西新町遺跡では、平成17年の調査で砂丘下から縄文時代前期森B式、曾畠系土器を含む包含層が見つかり調査されている。

弥生時代になると遺跡は海岸砂丘部まで分布する。今回調査した吉武遺跡群は室見川左岸域での最大の弥生集落である。開始時期は下流域の有田遺跡群や福重遺跡、右岸上流域の入部遺跡からはやや遅れるものの弥生時代前期後半から後期の集落や墓地群が検出されている。集落は前期後半に遺跡群北側から開始し、後期には全域に及ぶ。墓地ではこれまで壺棺墓などが約1200基検出されている。第14次地点北側の吉武高木・大石地区では前期末から中期初期の朝鮮半島製青銅武器・鏡・玉類の副葬品を持った壺棺墓・木棺墓などが見つかり、大石地区北側では中期中頃以降では中国漢代の鉄器類を副葬した桶渡墳丘墓が造営される。吉武高木・大石地区墓は早良平野では突出した豊富な副葬品を持ち、弥生時代のクニの始まりを考える上で学術的にも価値が非常に高く、国史跡「吉武高木遺跡」として指定を受けた。

古墳時代も弥生時代と同様な遺跡分布をするが、前方後円墳が少数ながら造られる。遺跡群内の橋渡前方後円墳や重留地区に灰塚古墳、西側丘陵部の羽根戸南古墳群G-2・3・F-3号墳などがある。また平野東側の油山山麓や平野西側の西山・飯盛山・叶岳山麓部に大規模な群集墳が造られる。

古代は早良郡であり、早良郡衙らしき官衙遺構が有田遺跡群内に検出されている。また金武乙石遺跡群などにも官衙状の大型建物群が見つかっている。古代の官道と思われる道路跡の一部も有田遺跡群内で検出されている。吉武遺跡群内では古代寺院跡も調査されており、吉武遺跡群が古代に至っても早良郡内で重要な地域であったことが分かる。中世になると、戦国期の山城が飯盛山山上に、また大北遺跡群内の室見川を望む台地先端に都地城が築かれる。

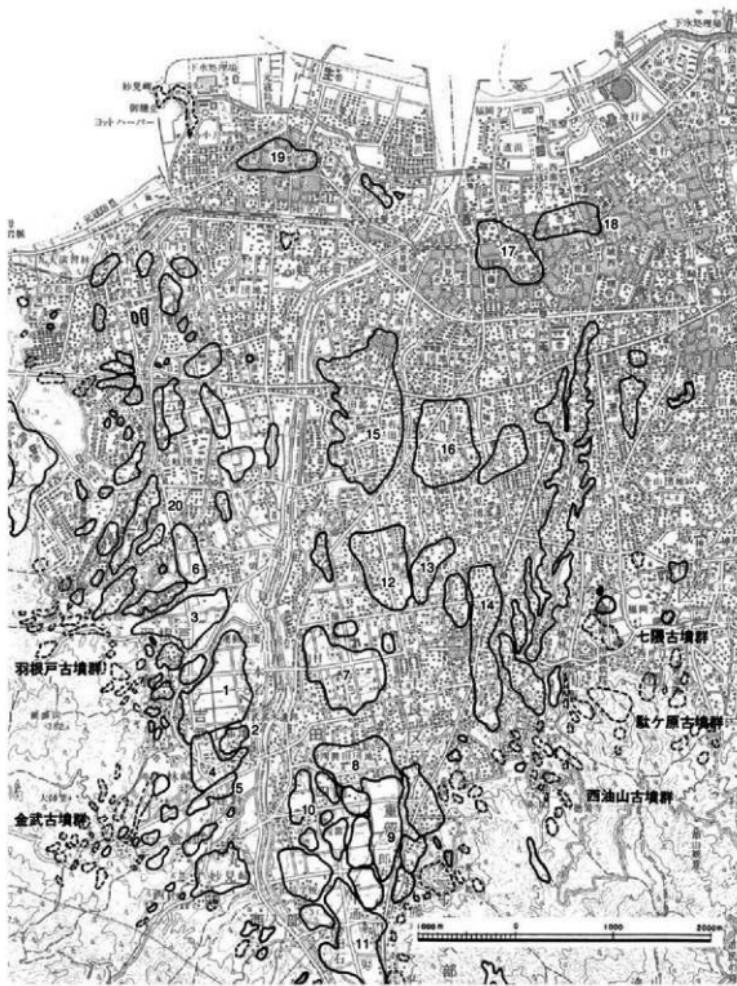


図1 吉武遺跡群・大北遺跡群周辺遺跡 (1/50,000)

- 1.吉武遺跡群
- 2.大北遺跡群
- 3.羽根戸原C遺跡群
- 4.都地遺跡
- 5.都地南遺跡
- 6.戸切遺跡群
- 7.田村遺跡群
- 8.四箇遺跡群
- 9.重留遺跡群
- 10.四箇大町遺跡群
- 11.東入部遺跡群
- 12.次郎丸高石遺跡
- 13.免遺跡群
- 14.野芥遺跡群
- 15.有田遺跡群
- 16.原遺跡群
- 17.藤崎遺跡群
- 18.西新町遺跡
- 19.姪浜遺跡群
- 20.野方久保遺跡群

第Ⅲ章 吉武遺跡群第14次調査

1. 調査の概要 (図2・5、写真1~3)

調査地は福岡市西区大字吉武字高木に所在する。調査区は多数の青銅利器を副葬した甕棺墓群が発見された第4次・5次調査区の南側に位置する。吉武遺跡群としては南側縁の一段段落ちした部分である。吉武遺跡群については飯盛・吉武圃場整備事業に伴って調査が行なわれ、弥生時代の墳墓群、弥生時代から古墳時代の大集落、古墳時代の樋渡前方古墳を含む古墳群（吉武古墳群）など重要な遺構が検出されている。

今回の調査は工事区域内の道水路や削平部分について行なった。調査は7月25日~9月16日まで実施した。調査実施面積は724m²である。調査地の現状は畠地と水田で、標高は21~22mを測り、西から東に階段状に低くなる。遺構面までの堆積土は0.3~0.4m厚の耕作土で、遺構面は明黄褐色礫混じり粘土となる。以前の段状の農地の造成によって、段下に近いほど削平を受けており、各段の先端部ほど遺構を検出した。調査区は各段毎に西から1~5小区に分けた。主な検出遺構は柵状遺構、堅穴住居跡、掘立柱建物、溝、土坑、ピットなどで、時期は弥生時代~古代が中心となる。

出土土器は大半が器壁の摩滅がひどく調整が不明であり、調整が分かるものについて記す。

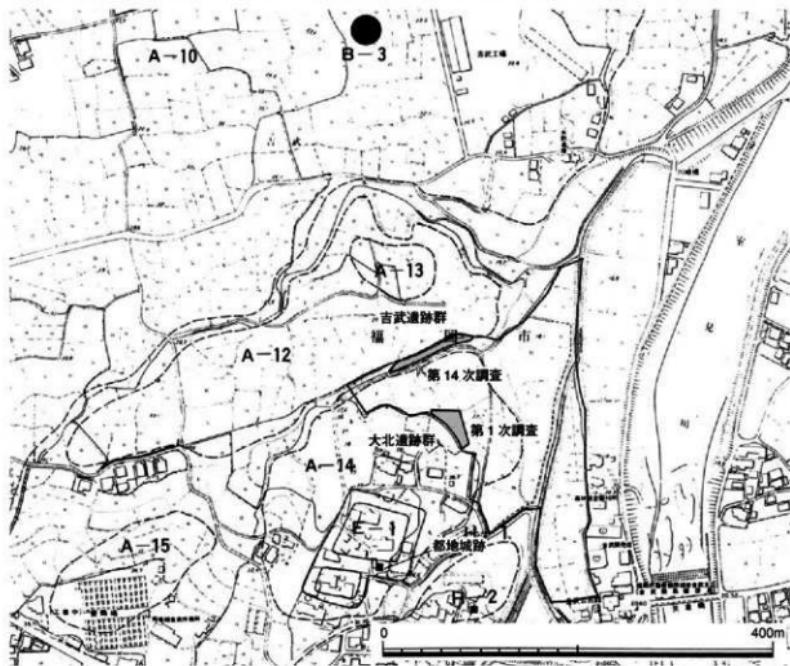


図2 調査地点位置図 (1/5,000)

(昭和54年3月現在)

2. 遺構と遺物

① 棚状遺構 (SA)

調査区中央部で並行する2条の棚を検出した。

SA01 (図3、写真5)

4区東側で検出した主軸をN-1°-Eに取る構で、柱穴は6基、5間分検出した。確認全長7.08mを測る。柱間間隔は1.26(4.2尺)~1.80m(6尺)を測る。柱穴平面形は円形または楕円形で、規模は長径で0.4~0.6m、深さ0.15~0.42mを測り、深さは一定していない。柱径は痕跡から約10cmである。埋土は断面観察をした柱穴で堀方は黄褐色粘土、又は黄灰色シルトブロックで、柱痕は暗褐色粘土又は黒褐色粘質土である。

出土遺物 各柱穴から弥生土器から古墳時代の土師器・須恵器の壊細片などと黒曜石剥片が少量出土。図示出来るものはない。

SA02 (図3、写真5)

SA01の東側5.4m離れて主軸をN-1°-Eに取って並行する構で、柱穴は6基、5間分検出した。確認全長は7.91mを測る。柱間間隔は1.20(4尺)~1.60m(5.3尺)を測る。柱穴平面形は円形または楕円形で、規模は長径で0.32~0.44m、深さ0.2~0.5mを測り、深さは一定していない。柱径は痕跡から約12cmである。埋土は断面観察をした柱穴で、堀方は灰白色シルト又はシルト粘土で、柱痕は黒褐色粘質土である。

出土遺物 (図7) 各柱穴から弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器の細片が少量出土。他に焼土塊、黒曜石剥片が出土。1は須恵器の壊蓋天井部1/6片。天井部外面は回転ケズリ、内面は回転ヨコナデ。色調は灰色を呈し。胎土は6mm内粗砂を多く含む。

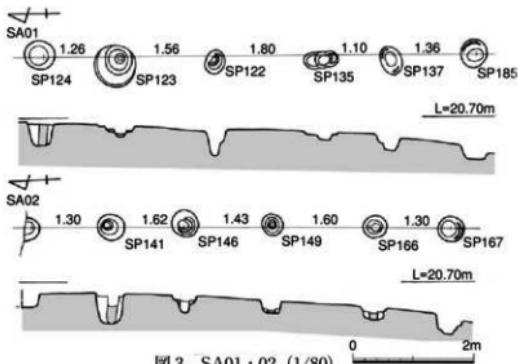
② 挖立柱建物 (SB)

6棟検出した。この他にも柱痕跡を残すビットもあったが、建物として復元出来なかった。

SB01 (図4、写真4・6・7)

2区東側で検出した主軸をN-79°-Eに取る2×2間の個柱建物。桁行き全長は3.6・3.8m、梁間全長は2.94・3.0m、床面積は10.99m²を測る。柱穴平面形は円形か隅丸方形で、規模は長径0.6~0.8mと大きく、深さは0.3~0.7mと比較的深い。柱径は柱根が残っていたSP35は径18cmの断面円形である。埋土は黄褐色粘土と黒褐色粘土が主体で、柱痕跡は暗青灰色粘土から黒褐色粘質土である。

出土遺物 (図7) 各柱穴から弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、黒曜石剥片などが出土。大半が細片で、図示出来るものは少ない。2・3は須恵器の壊蓋小片。調整はいずれも回転ヨコナデ。色調は2は灰色、3は橙色を呈し、胎土は2は細砂粒を含み、3は



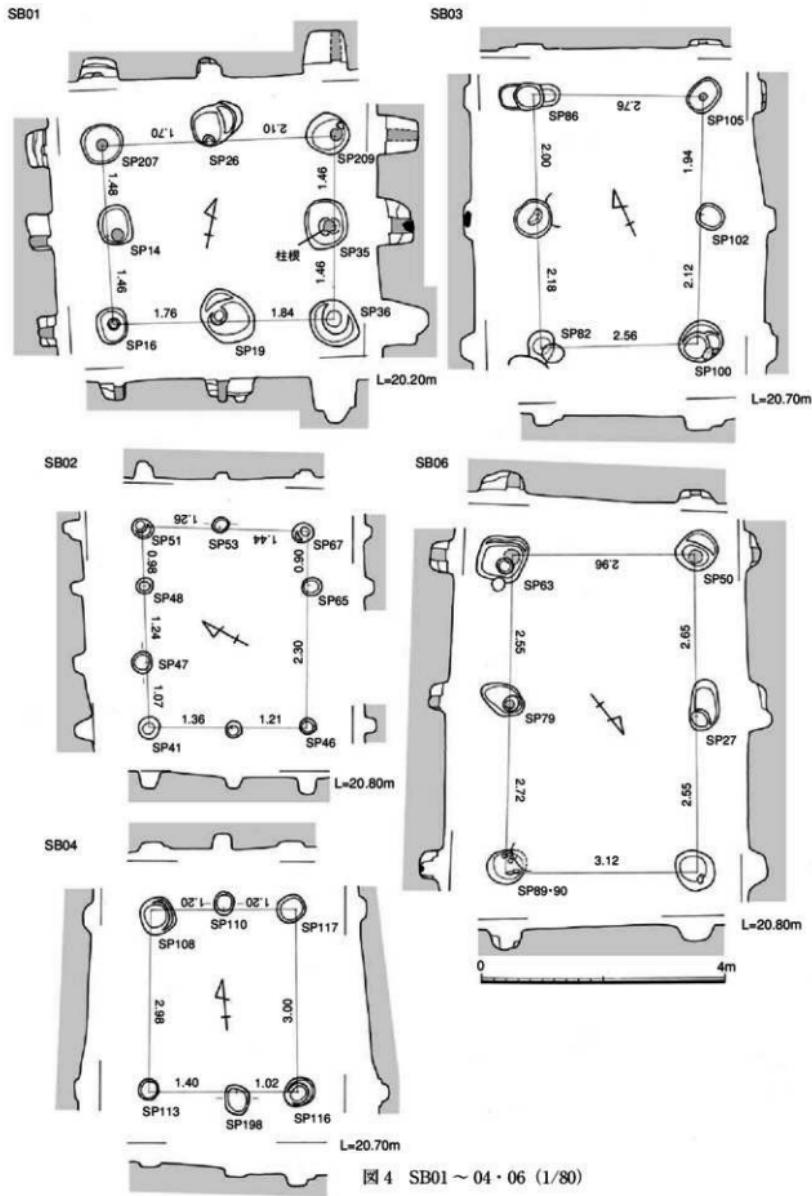


図4 SB01～04・06 (1/80)

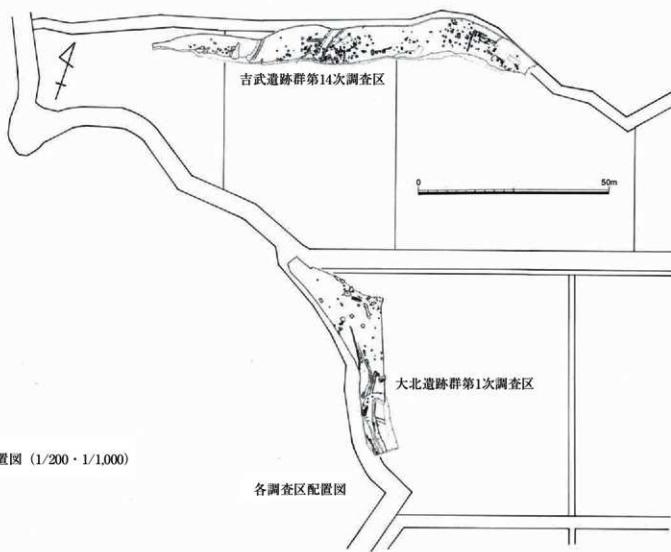
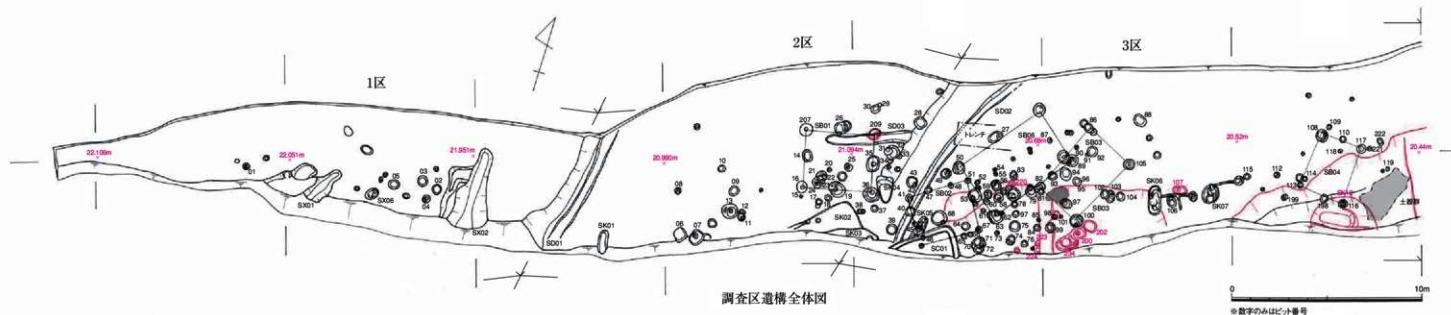


図5 調査区構成全体図、各調査区配置図（1/200・1/1,000）

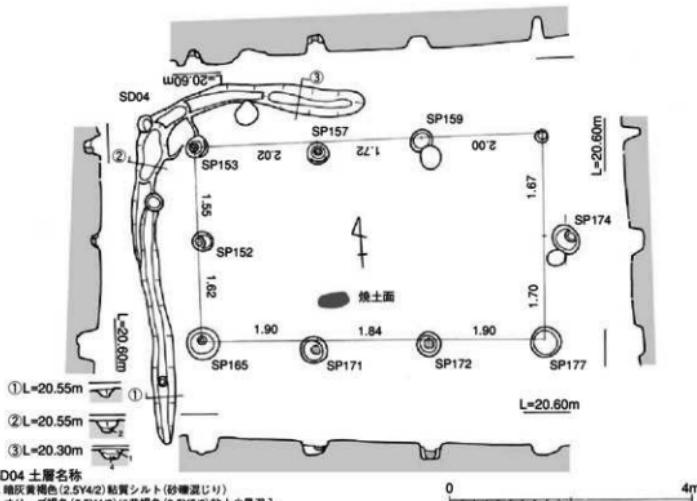


図6 SB05、SD04 (1/80)

精良。3の焼成は不良。

SB02 (図4、写真4・8)

3区西側で検出した主軸をN-57°30'-Eに取る2×3間の側柱建物。SC01を切り、桁行き全長は3.2・3.29m、梁間全長は2.57・2.7m、床面積は8.55m²を測る。柱穴平面形は円形か梢円形、規模は長径で0.24～0.36mと小さく、深さは0.1～0.3mと比較的浅い。埋土は黒褐色粘土を主体とする。柱径は柱痕跡から最大でも14cmほどか。

出土遺物 (図7) 各柱穴から弥生時代前中期以降の土器が出土。細片が多く図示出来る遺物は少ない。4～7は弥生時代前中期から中期前半ころのもの。4は錫形口縁の大型壺口縁部1/8片。復元口径36.8cmを測る。口縁端部両側には刻目が付く。色調は灰白色を呈す。5は壺口縁部1/8片。復元口径26.6cmを測る。胴部には低い台形状の突帯が貼付き、口縁端部と突帯にはかすかに刻目が残る。4・5とも器壁は摩滅し調整は不明。内面には粘土塊が付着する。色調は灰黄褐色を呈す。6～8は口縁部細片。色調は4は灰白色、5が灰黄褐色、6・7が淡橙色、8は鈍い褐色を呈し、胎土は4～6・8は2mm、7は4mm内砂粒を多く含む。

SB03 (図4、写真4・9)

3区西側SB02の東で検出した主軸をN-25°-Eに取る1×2間の建物。桁行き全長は4.06m・4.18m、梁間全長は2.56m・2.8m、床面積は11.42m²を測る。柱穴平面形は円形か梢円形、規模は長径で0.46～0.72mと比較的大きく、深さは0.1～0.2mと比較的浅い。埋土は黒褐色粘土を主体とする。柱径は柱痕跡から見て10cmほどか。また根石が残った柱穴もあった。

出土遺物 (図7) 各柱穴から弥生土器や黒曜石剥片が少量出土。細片で図示出来るものは少ない。図示したのは中期初め～中頃にかけてのもの。9は壺口縁部細片。須玖I式の逆L字形口縁の細片。器壁は摩滅し調整は不明。10は壺の上げ底の底部。外底部の調整はナデ。色調は、9は褐色、10は

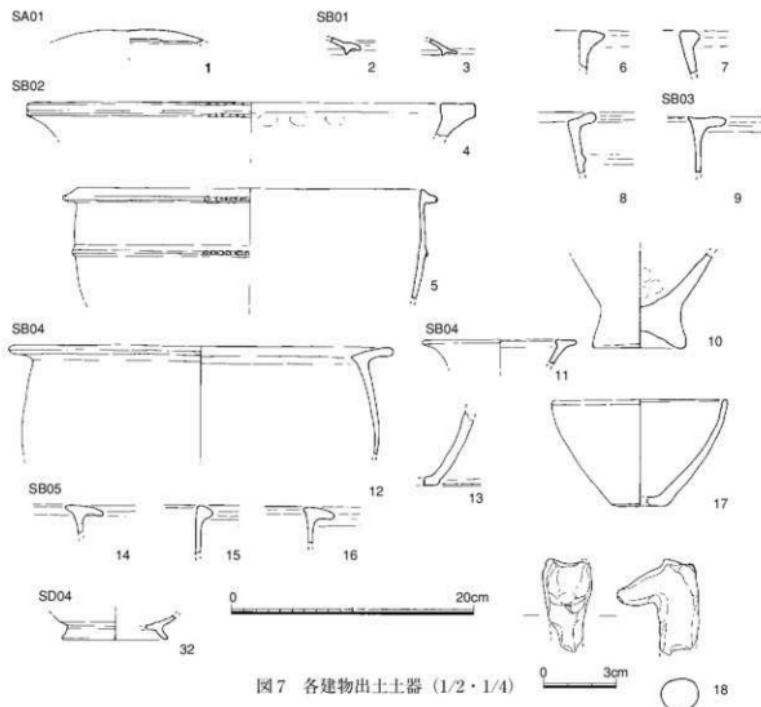


図7 各建物出土器 (1/2・1/4)

浅橙色を呈し、胎土は9は2mm内砂粒を、10は4mm内粗砂粒を多く含む。

SB04 (図4、写真10)

3区中央段落ち部上面で検出した主軸をN-4°-Eに取る1×2間の建物。桁行き全長は2.98m・3.0m、梁間全長は2.4m・2.42m、床面積は7.21m²を測る。柱穴平面形は楕円形か隅丸方形、規模は長径で0.36～0.58mと比較的大きく、深さは0.06～0.2mと比較的浅い。埋土は黒褐色粘土を主体とする。

出土遺物 (図7) 各柱穴から弥生土器や黒曜石剣片が少量出土。大半が細片で、図示したのは弥生時代中期中頃のもの。11は彫頭口縁壺の口縁部1/6片。色調は純い橙色を呈し、胎土は1～2mm砂粒を多く含む。12は甌の口縁部1/5片。復元口径31.6cmを測る。色調は内外面黒ずみ、暗い灰黃褐色を呈す。胎土は1mm内細砂粒、金雲母細片を含む。13は鉢の底部の小片か。調整は内外面ナデ。色調は橙色を呈し、胎土は1mm内外砂粒を含む。

SB05 (図6、写真12)

3区東側で検出した主軸をN-86°-Wに取る2×3間の建物。桁行き全長は5.64m・5.76m、梁間全長は3.17m・3.37m、床面積は18.64m²を測る。柱穴平面形は円形か楕円形、規模は長径で0.2～0.50mと大きさに差があり、深さは0.15～0.35mと比較的浅い。埋土は黒褐色粘土を主体とする。柱径は柱痕跡から12～14cmである。建物西側から北側にかけて直角に曲がる溝SD04があり、この

建物に関連すると思われる。SD04については溝の項で詳細を述べる。また建物内には焼上面がある。

出土遺物（図7） 各柱穴から弥生土器、黒曜石剥片が少量と、古墳時代以降の須恵器細片が1点出土する。図示した遺物は弥生時代中期初め～後半の弥生土器であるが、SD04からも1点須恵器細片が出土しており古墳時代以降の可能性がある。14～16は弥生土器壺口縁部小片。色調は鈍い赤褐色、鈍い黄橙色、鈍い橙色、鈍い褐色で、胎土は15が精良で、他は1～3mm程の砂粒を多く含む。

SB06（図4、写真11）

3区西側で検出したSB03と重複する主軸をN-38°-Eに取る1×2間の建物。桁行き全長5.2m・5.27m、梁間全長2.88m・3.12m、床面積は15.71m²を測る。柱穴平面形は隅丸方形又は不整梢円形で、規模は長径で0.6～0.8mと比較的大きく、深さは0.2～0.4mと比較的浅い。埋土は黒褐色粘土を主体し、柱痕跡が残るものもある。柱径は痕跡から12～14cmである。

出土遺物（図7・14、写真24） 各柱穴から弥生土器、石剣片、黒曜石剥片が出土。17は弥生時代中期の鉢1/3片。復元口径14.4cm、器高8.7cmを測る。17の色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土はいずれも2mm内砂粒を多く含む。18は馬と思われる土製品の頭部。頭部には両耳らしき突起がある。残存縦長3.8cm、残存横幅3.3cm、頭部径1.3×1.6cmを測る。表面は摩滅が著しい。色調は橙色を呈し、胎土は精良、金雲母粒を含む。古墳時代以降の土馬と考えるが、ピットからは弥生土器しか出土せず、混入の可能性がある。S1は石剣片。残存長4.9cm、幅4.0cmを測る。表面は丁寧な研磨仕上げ。色調は褐灰色を呈し、石材は輝緑凝灰岩。

③ 積穴住居跡（SC）

SC01（図8、写真13）

3区西側で検出した。南側は段落ちで切られ全体の形状は不明であるが、平面形状は方形を呈す。確認規模は東西長3.4m以上、短軸長は1.9m、残存壁高約0.2mを測る。北壁沿いには幅0.2～0.26m、深さ3～7cmほどの周壁溝が巡る。埋土は黒褐色粘土質。炉跡や主柱は不明。

出土遺物（図9・14、写真26） 弥生時代中期の土器、石包丁、石斧、黒曜石剥片などが出土。19は壺の頸部小片。調整はナデ。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土に1mm内金雲母・砂粒を含む。20～23は壺。20は逆L字形の口縁部で、復元口径は20.8cmを測る。21は「く」字状に外反する口縁で、

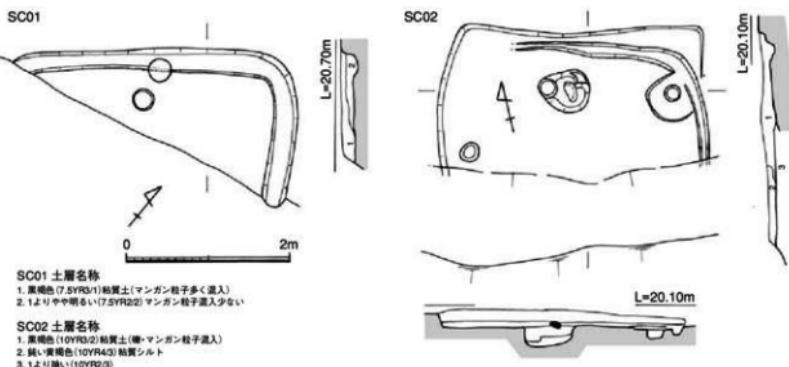


図8 SC01・02 (1/60)

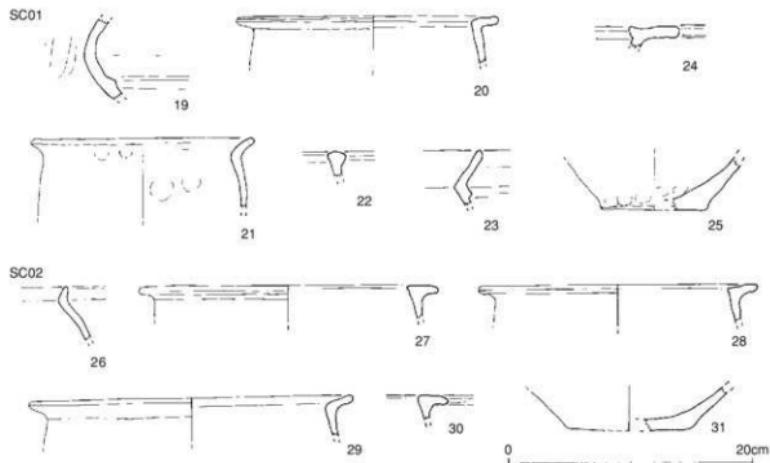


図9 堅穴住居跡出土土器 (1/4)

復元口径18.4cmを測る。色調は20は灰黄色、21は明褐色を呈す。胎土は、20は2mm内砂粒が多く含み、21は3mm内砂粒と雲母微粒を含む。22は中期初め頃の壺の口縁細片。23は「く」字状の口縁部細片で頭部に突端が付く。調整は23がかろうじてナデ。色調は22は灰色、23は灰黄褐色を呈し、胎土は、22は1mm内砂粒、23は2mm内砂粒と微粒の雲母粒を含む。23の焼成は軟質でやや不良。24は高坏と想われる錐形の口縁部片。調整はヨコナデ。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は1mm内砂粒と微粒の雲母を含む。25は壺の底部1/2片、復元底径8.6cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土は2mm内砂粒を多く含む。S2は石包丁1/2片。残存長8.75cm、幅3.5cmを測る。表面は丁寧な研磨で、刃部は使用により摩滅する。灰色を呈し、石材は粘板岩か。S3は小型の扁平片刃石斧片。残存長3.0cm、幅2.95cmを測る。表面は丁寧な研磨仕上げ。色調は灰白色を呈し、石材は頁岩。

SC02 (図8、写真14)

4区東側で検出した。南側は段落ちで切られ全体の形状は不明であるが、確認形状は方形を呈す。確認規模は東西長3.3m、短軸長は1.9m以上、壁残存高約0.16mを測る。北壁沿いには一部幅0.12～0.18m、深さ6～12cmほどの周壁溝が巡る。埋土は黒褐色粘質土で礫石、焼土ブロック、マンガン粒子を含む。炉跡や主柱は不明。

出土遺物 (図9) 弥生時代中期～後半頃の土器、黒曜石剥片などが出土。26は短頸壺口縁部細片。色調は鈍い橙色を呈し、胎土は2mm内砂粒を多く含む。27～30は壺で逆L字形の口縁部を持つ。27・28は1/9片、29は1/12片、30は細片で、復元口径は27が24.7cm、28が22.6cm、29が26.6cmを測る。色調は27は橙色、28は赤褐色、29は浅黄橙色、30は明晰褐色を呈し、胎土は27・29・30は1～2mm内砂粒、28は3mm内砂粒を多く含む。31は壺の底部1/3片。復元底径9.8cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土は1～2mm内砂粒を多く含む。

④ 溝状遺構 (SD)

4条検出した。いずれも小溝で残りは悪い。

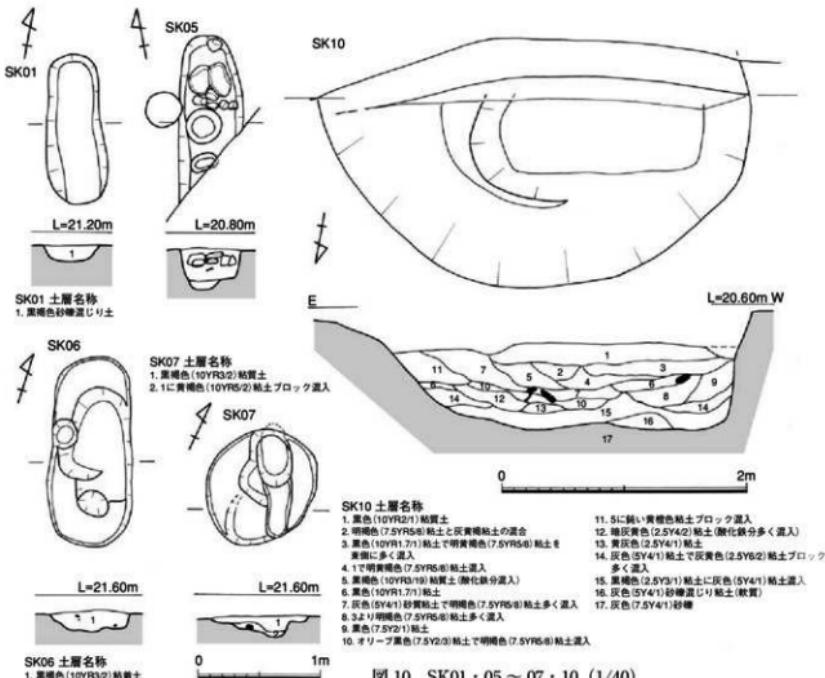


図10 SK01・05～07・10 (1/40)

SD01・SD02

SD01は2区西側で検出した農地の段落ち下の小溝。規模は全長7m、最大幅0.5m、最大深さは2~6cmと浅い。埋土は暗灰黄褐色砂で農地に伴う溝であろう。出土遺物は弥生土器片が少量出土。

SD02は3区西側で検出した南西から北東に延びる小溝。確認長11m、溝幅0.2~0.5m、深さ4~12cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質土。この溝もSD01と同じように農地の区画溝であろう。出土遺物は弥生土器の細片が少量出土。

SD03

2区東側で東西に延びる小溝。東側は段落ちで途切れる。全長4.5m、幅0.5~0.64mで、深さは5cmほどで浅い。埋土は暗灰黄褐色粘細砂。鉄滓が多数出土している。出土遺物は土師器と思われる土器片や須恵器、黒曜石剥片が小量出土。

SD04

3区東側、SB05の北西側を「く」形に囲む小溝。溝は他遺構と切り合い、南側は整地面上で検出した。確認規模は南北長5.3m、東西長3.7m、溝幅は南北溝で幅0.3~0.35m、東西溝で幅0.4m、深さは0.15~0.2mを測る。埋土は、上層は暗灰黄褐色粘質シルトからオリーブ褐色粘質シルトで、下層はそれに黒褐色粘土又は砂が混入する。SB05の雨落ち溝、または区画溝などと関連があると考える。

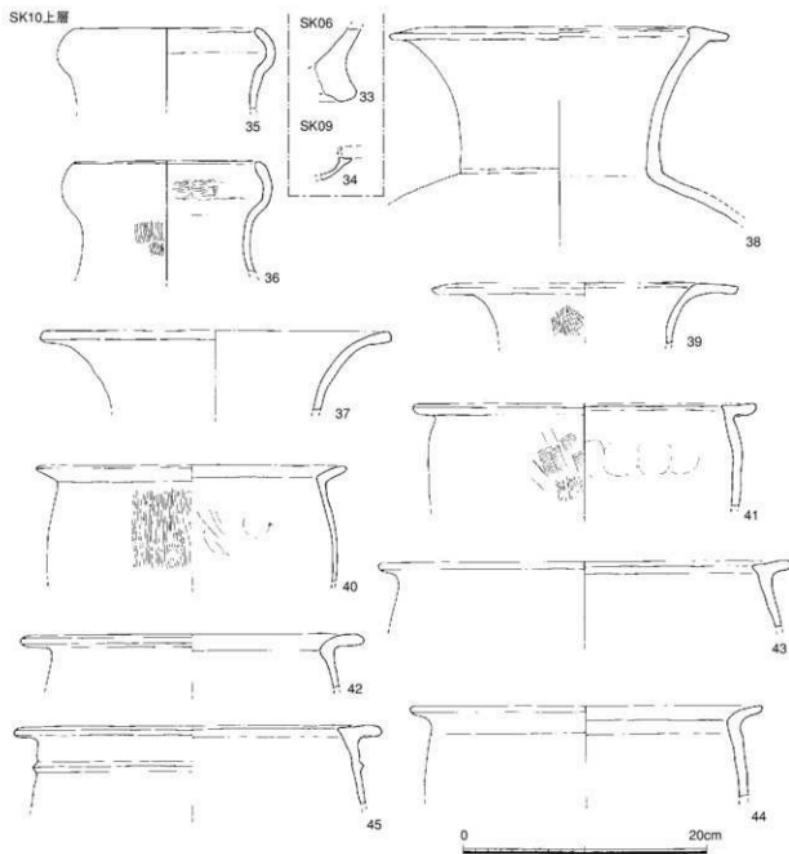


図11 SK06・09・10出土土器 (1/4)

出土遺物 (図7・14) 弥生時代から古墳時代の土器片や古墳時代後期頃の須恵器、石包丁片、黒曜石剥片などが出土。細片が多く図示出来るものは少ない。32は須恵器で高台が付く壊底部1/6片。復元底径8.4cmを測る。器壁は摩滅し調整は不明。色調は褐灰色を呈し、胎土は精良。焼成はやや不良。S4は石包丁片。残存長6.7cm、幅4.5cmを測る。研磨調整であるが摩滅がひどい。色調は灰オリーブ色を呈し、石材は粘板岩か泥岩。

④ 土坑 (SK)

土坑番号を付したものは10基。主なものを報告する。

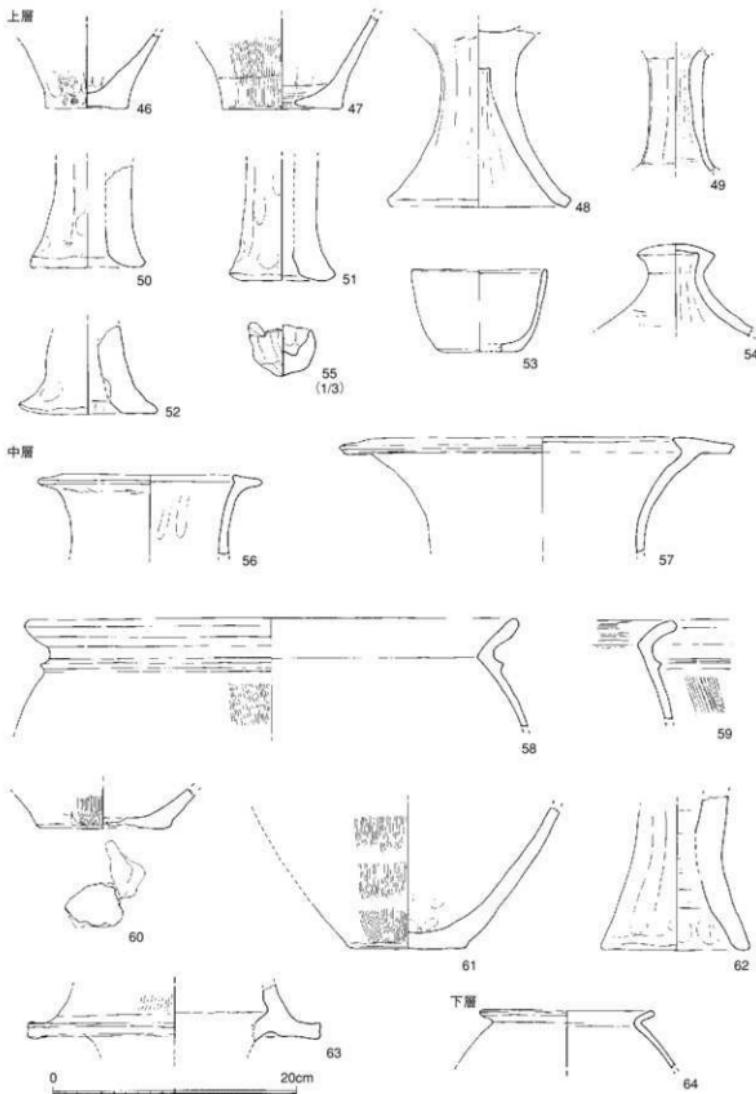


図12 SK10出土土器② (1/3・1/4)

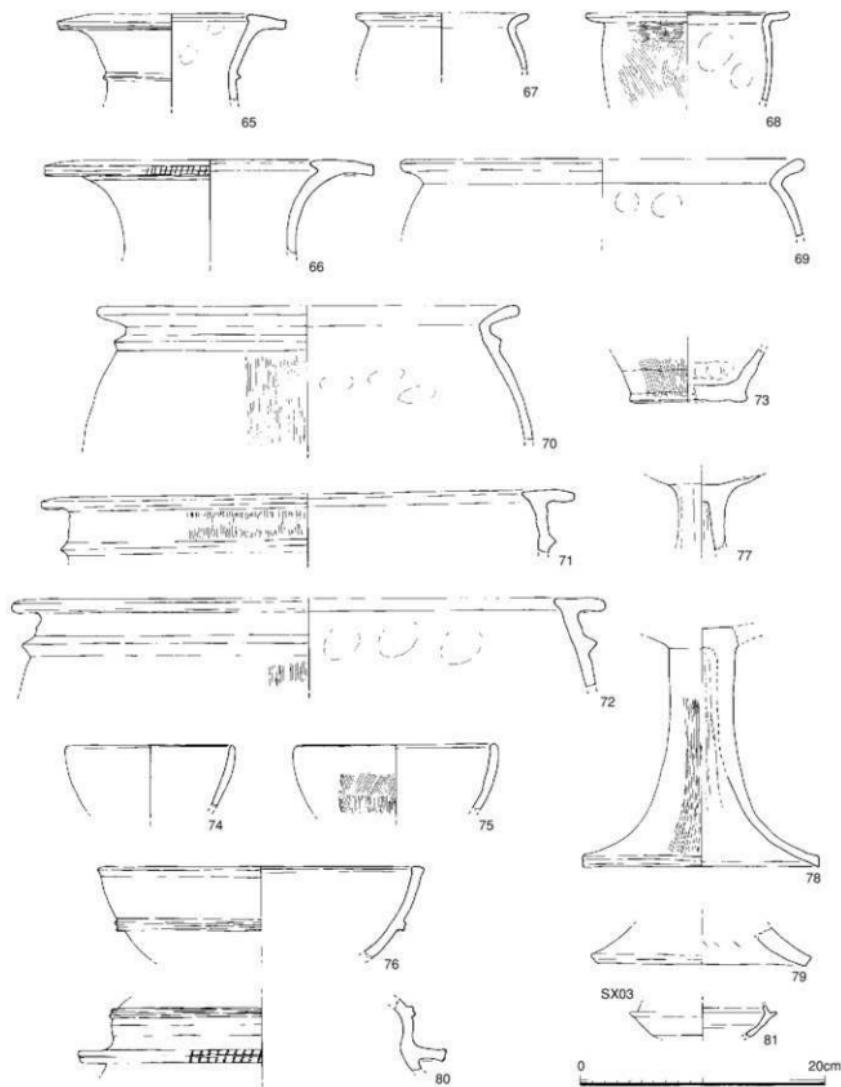


図13 SK10出土土器③、SX03出土土器 (1/4)

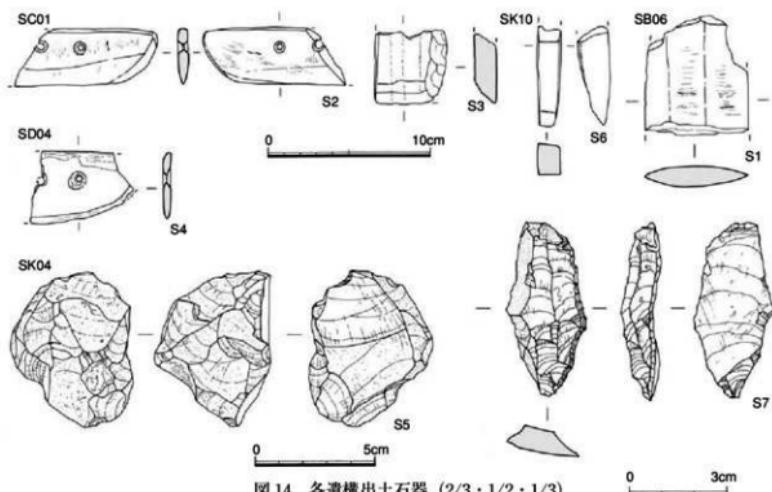


図14 各遺構出土石器 (2/3・1/2・1/3)

SK01 (図10)

2区西側で検出した長楕円形状の土坑。南端は段落ごとに切られる。規模は長軸長1.22m、短軸幅0.5m、最大深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色砂礫混じり土。出土遺物は弥生土器らしき細片1点と鉄滓が6点出土。

SK04 出土遺物 (図14) S5は黒曜石の石核自然面と剥離面が残る。古い剥離面と新しい剥離面があり、古い面は風化が進んでいる。この他サヌカイトの剥片などがある。

SK05 (図10、写真15)

3区西側で検出した平面が丸味を持つ長方形を呈す土坑。SC01に切られる。規模は長軸長1.4m以上、短軸幅は中央部で0.5m、深さは0.22mを測る。人頭大の自然縛を底面から浮いた状態で検出し、またピットを2基底面で検出した。埋土は黒褐色粘質土。出土遺物は弥生時代中期の土器片や黒曜石剥片が出土。細片で図示出来ない。

SK06 (図10、写真16)

3区中央部で検出した平面不整形形状の浅い土坑。規模は長軸長1.64m、短軸幅0.68m、最大深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色粘質土である。底面はピットや浅い窪みで凹凸がある。

出土遺物 (図11) 弥生土器の細片が少量出土。33は弥生時代中期前半の土器底底部1/4片。器壁は摩減し調整不明。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は2mm内砂粒多く含む。

SK07 (図10、写真17)

3区中央部で検出した平面円形を呈す土坑。長軸長0.95m、短軸長0.9m、底面は両側にテラスを持って深くなる。最大深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色粘質土で下部に黄褐色粘土ブロック混入。

SK09

4区西側で検出した隅丸長方形形状の土坑。規模は長軸長0.87m、短軸長0.5m、深さ約5cmほどを測る。埋土は黒褐色砂礫混じり土で、酸化鉄分、マンガン粒が多く含む。

出土遺物 (図11) 弥生中期頃の土器と古墳時代後期の須恵器が出土したが、大半が細片で弥生土器が多い。34は須恵器の坏身細片。調整は回転ヨコナデ、色調は灰色を呈し、胎土は精良。形態か

らIV期頃のもの。

SK10 (図10、写真18)

3区東側包含層下で検出した土坑で、南側が段落ちにかかり消滅し、平面は半円形を呈す。確認規模は長軸長3.5m、短軸長2.06m、深さ0.92mを測る。底面は西側が僅かに深くなる。埋土は黒色粘質土や粘土を主体とするが、下層は灰色粘土や灰色砂礫混じり粘土を含み粘性が強く軟質になる。

出土遺物 (図11～14、写真24) 弥生時代中期中頃から後半の土器が多量出土。

35～55は上層出土。35～39は壺。35・36は中期後半代の袋状口縁壺の口縁部1/6片・1/4片。復元口径15.0cm・15.2cmを測る。36は内外面ハケ目が残る。色調は35は鈍い黄橙色、36は鈍い橙色を呈し、胎土は35が5mm内粗砂粒が多く含み、36は精良。37は大きく開く口縁部1/6片。復元口径28.6cmを測る。37の外面には丹塗り痕が残る。色調は橙色を呈し、胎土は精良。38・39は動形口縁壺。38は1/2弱片で復元口径27.6cmを測る。調整は器壁はやや摩滅するが丁寧な平滑なナデ。色調は鈍い褐色を呈し、胎土は1～2mm砂粒を含む。39はかろうじて口縁内面に段を有す1/4片で、復元口径25cmを測る。外面ハケ目が残る。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土は精良。焼成はやや不良。40～45は甕。いずれも口縁部片で、1/2片・1/3片・1/8片・1/3片・1/4片・1/6片。口径は復元で25.2cm・28cm・28cm・33.6cm・28.4cm・29.0cmを測る。45は胴部上半に三角突帯が付く。40・41の外面にはハケ目が残る。色調は灰白色・灰白色～灰黃褐色・灰白色・灰黃褐色・浅黃橙色を呈し、胎土はいずれも砂粒を含むが、45は5mm内粗砂粒が多く含む。41・43・45は微粒の雲母片も含む。焼成は44以外は不良。46・47は甕の底部。底径6.8cm・9.7cmを測る。47の底部には径1.8×2.5cmの円孔が焼成後に穿たれている。46は外面ハケ目調整、47は外面ハケ目と内面はナデ調整。色調は、46は明褐灰色、47は灰黄色を呈す。胎土は46は4mm、47は2mm内砂粒を多くと雲母微粒を少量含む。48・49は高环脚部。48は2/3片、脚幅径15.0cmを測る。49は脚筒部片。48の内面はナデ調整。内面にはシボリ痕が残る。色調は48は淡橙色、49は灰白色を呈す。50～52は支脚の底部。底径9.4cm・8.6cm・11.4cmを測る。調整は器壁はやや摩滅するがナデ。色調はいずれも橙色を呈し、胎土は50・51は2～3mm内砂粒、52は5mm内砂粒を含み、いずれも微粒の雲母片も含む。51の焼成は良好。53は鉢1/3片。復元口径11.0cm、器高6.75cmを測る。調整は器壁がやや摩滅するがナデ調整。色調は暗灰黄色を呈し、胎土は1mm前後砂粒多く含む。54は蓋。色調は淡橙色から褐灰色を呈し、胎土は2mm内砂粒を多く含む。55は手捏ねのミニチュア土器1/2片。口径3.9cm、器高3.3cmを測る。色調は浅橙色を呈し、胎土は精良。

56～63は中層出土。56・57は壺。錐形の口縁で、56は4/5片で口径は18.7cm、57は31.0cmを測る。56の口縁部外面にハケ目工具の痕跡が残る。色調は56は淡橙色、57は鈍い黄橙色を呈し、胎土は56は4mm内砂粒を多く含み、57は精良。58～61は甕。58・59は頸部に三角突帯が付く。58は口縁部1/4片で、復元口径40.0cmを測る。調整は胴部外面はハケ目、59は口縁部内面もハケ目。色調は58は鈍い黄橙色、59は灰黃褐色を呈し、胎土は58は精良、59は1mm内砂粒を多く含む。60・61は底部。60はやや歪み、底径10.8×11.1cmを測る。底部には焼成後穿孔の4.8×3.5cmの孔がある。器壁はやや摩滅するが、外面底部ナデ、胴部ハケ目調整。黒斑がある。61は大型の底部。底径

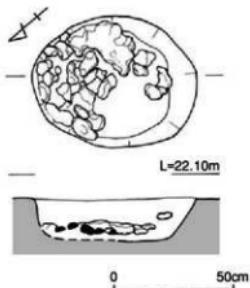


図15 SX06 (1/20)

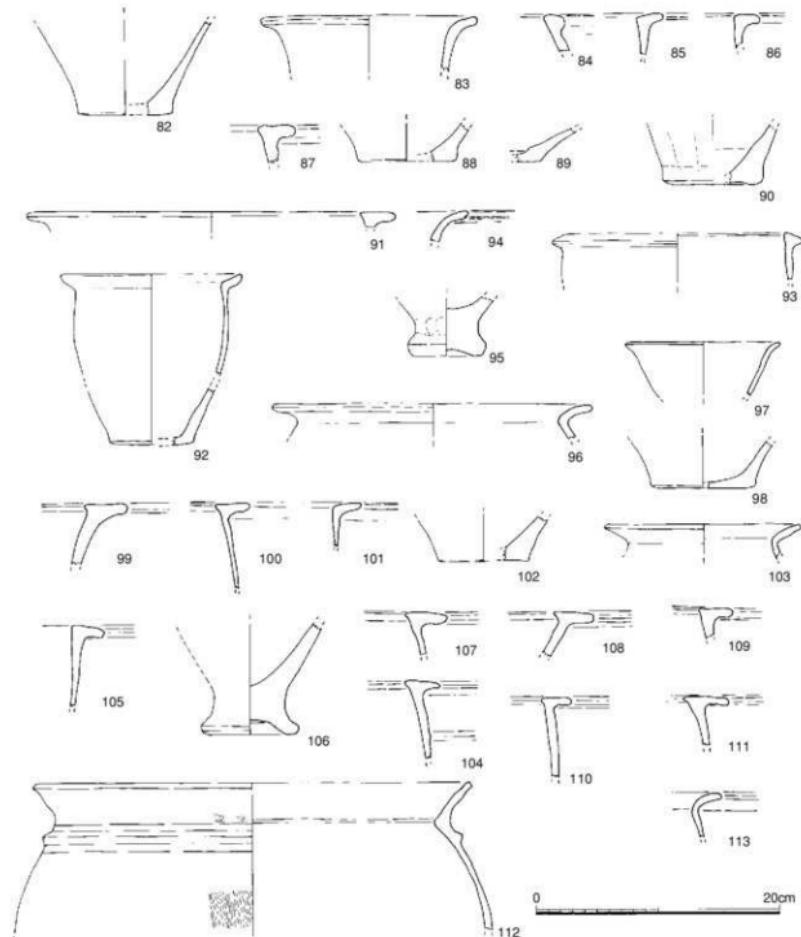


図16 ピット出土土器①(1/4)

8.6 cmを測る。調整はやや摩滅するが、外面はハケ目、内面はナデ、内底では指押え痕が残る。色調はいずれも鈍い黄橙色を呈し、60の外面には黒斑がある。胎土は、60は2 mm内砂粒が多く、61は1 mm内外砂粒を含む。62は中空の支脚。底径12.3 cmを測る。調整は外面タテナデ。色調は橙色を呈し、胎土は2 mm内砂粒を多く含み、赤色粒子、雲母片を含む。63は筒形容器の小片。調整はナデで外面ハケ目がかすかに残る。色調は淡橙色を呈し、外面丹塗り痕が残る。胎土は精良で1 mm内細砂粒・雲母微粒含む。

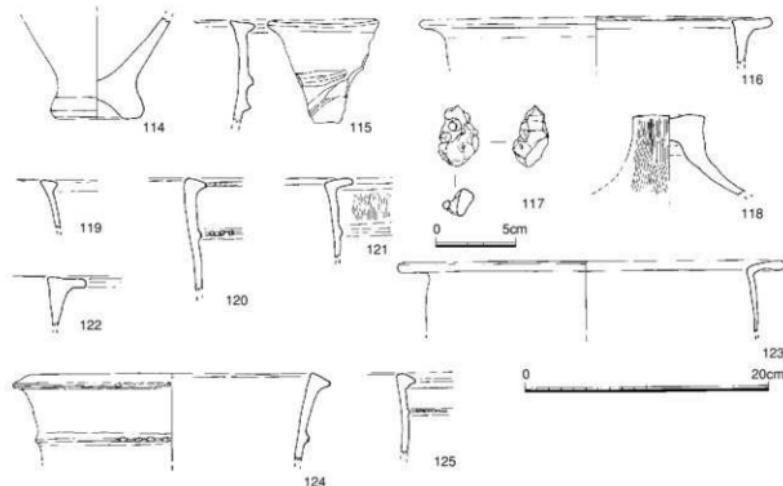


図17 ピット出土土器② (1/3・1/4)

64～80は下層出土。64～66は壺。64は壺口縁部1/5片。復元口径14.2cmを測る。調整は外面部寧なハラミガキ、内面はナデ調整。色調は外面部丹塗りで赤褐色を呈し、胎土は精良。65・66は鉢形口縁の壺。65は口縁部1/2片で、復元口径18.6cmを測る。調整は外面部ヨコナデ。66は内外面部丹塗り。口縁部1/2弱片で、復元口径27.0cmを測る。口唇部にはヘラによる刻目がある。色調はいずれも灰白色を呈し、胎土は65は精良、66は2mm内砂粒を含む。65の焼成はやや不良。67～72は甕。67・68は小型の甕口縁部1/4片・1/2片で、復元口径14.0cm・16.6cmを測る。68はハケ目調整。色調は鈍い橙色、色調は褐灰色を呈す。胎土は、67は2mm内砂粒、68は精良。69は1/10片で、復元口径33cmを測る。器壁はやや摩滅するが、調整はナデ。色調は褐灰色を呈し、胎土は2mm以下砂粒を多く含む。70～72は頸部に1条の突帯を巡らす甕。いずれも口縁部から胴部片。70は口縁直下に突帯が付く1/5片で、復元口径34.4cmを測る。調整は器壁がやや摩滅するが内外面ナデである。71・72大型甕。71は1/10片で、復元口径43.6cmを測る。調整は外面部ハケ目、内面はヨコナデで部分的に剥落がある。72は1/5片で、復元口径48.4cmを測る。調整はヨコナデで、外面部ハケ目。色調はいずれも灰白色を呈し、胎土は71は若干1mm内細砂を含むが精良。72は2mm内砂粒と雲母微粒を含む。73は底部1/2片で、底径9.6cmを測る。底部は僅かに上げ底。調整は胴外面ハケ目、底部から内面はナデ。色調は鈍い橙色を呈し、胎土は2mm以下砂粒を多く含む。74・75は素口縁の鉢。1/4片・1/3片で、復元口径は13.8cm・16.9cmを測る。調整は74は内外面部寧なナデ、75は体部外表面ハケ目、口縁部外表面から内面はヨコナデ。色調は74は鈍い黄橙色、75は浅黄橙色を呈す。胎土は74は1mm内外砂粒多く含む、75は1mm内細砂粒を少量含む。76～79は高坏。76は素口縁の坏部1/4片で、復元口径26.6cmを測る。体部中央にM形突帯が巡る。器壁はやや摩滅するがナデで、内外面部丹塗りの痕跡が残る。色調は鈍い赤褐色を呈し、胎土は精良。77～79は脚部。77は坏との接合部で器壁はやや摩滅するが坏部と脚内面は丹塗り。脚内面はシボリ痕が残る。78は1/2弱片。復元底径

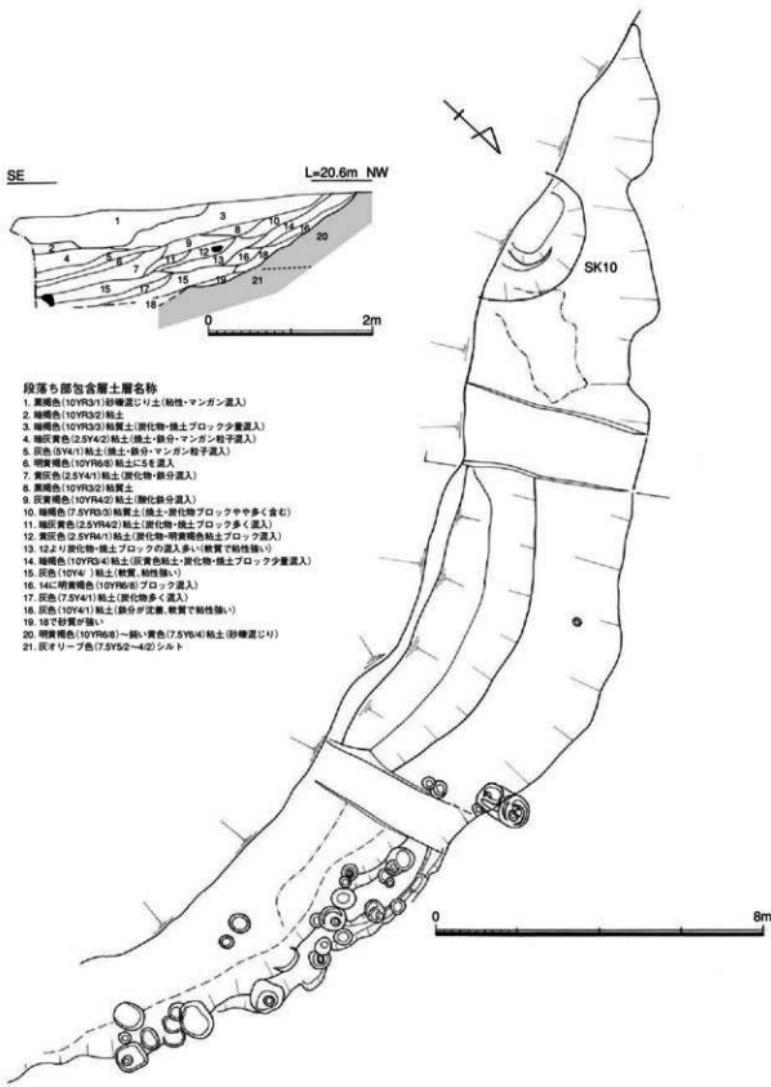


図18 谷部下層遺構状況 (1/60・1/120)

19.4 cmを測る。器壁は摩滅するが外面はタテケズリ、内面はナデでシボリ痕が残る。外面は丹塗り。**79** は裾部1/6片で、復元底径18 cmを測る。調整は内面ナデで、外面丹塗り。胎土の色調は**77・79** は灰白色、**78** は鈍い黄橙色を呈す。胎土は**77・79** は精良、**78** は2 mm内砂粒を含む。焼成は**77・79** はやや不良。**80** は瓢形土器の肩部小片。2条のM字突帯が巡る。下の突帯には刻目を施す。器壁は摩滅するが外面ヨコナデ、内面は不明。色調は外面丹塗りで淡橙色を呈し、胎土は精良で雲母微粒を含む。**S6** は方柱状の片刃石斧片。残存長4.1 cm、幅1.0 cmを測る。表面は丁寧な研磨仕上げ。色調は灰白色を呈し、石材は頁岩。

(6) その他の遺構 (SX) 出土遺物

SX03・SX04

いずれもSB05内で検出した不定形状を呈す浅い落込み。同一遺構の可能性はある。

出土遺物 (図13) 弥生土器から古墳時代後期の土師器・須恵器が出土。**81** は須恵器の坏身小片。受部径12.0 cmを測る。調整は回転ヨコナデ。色調は褐灰色を呈し、胎土は砂粒を含む。

SX06 (図15、写真19)

1区中央南側で検出した楕円形土坑。長軸長0.68 m、短軸長0.53 m、深さ0.17 mを測る。底面に鉄滓・金氣混じり粘土が北東側で出土した。廃滓坑であろうか。出土遺物はない。

(7) ピット出土遺物 (図16・17・14)

ピット番号を付し出土遺物を取り上げたのは239基。埋土の色は大きく褐灰色、黄褐色。黒褐色、暗褐色を主体とする4種類に分かれる。

82 はSP05出土。弥生土器の甕口縁部1/5片。復元底径7.7 cmを測る。色調は鈍い褐色を呈し、胎土は2 mm内砂粒を多く含む。**83** はSP11出土。弥生土器の壺の口縁部1/12片で、復元口径17.6 cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土は5 mm内粗砂を多く含む。**84～88** はSP13出土。**84～87** は中期前半頃の甕口縁部細片。色調は**84・85** は灰黄褐色、**86** は鈍い黄橙色、**87** は灰褐色を呈し、胎土は**84～86** は1～2 mm内外砂粒を多く含み、**87** は1 mm内外砂粒を少量含む。**88** は底部1/4片で、復元底径8.0 cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土は1 mm内外砂粒少量含む。**89** はSP20出土。弥生土器壺の底部小片。色調は黒色を呈し、胎土は2 mm以下砂粒を多く含み、焼成は不良。**90** はSP21出土。弥生土器の甕底部1/6片。底径8.0 cmを測る。胎土は1 mm内砂粒多く含み、黒色粒子・赤色微粒子も少量含む。焼成は不良。**91** はSP23出土。弥生時代中期中頃の甕口縁1/15片。復元口径約30 cmを測る。色調は鈍い橙色を呈し、胎土は3～7 mm粗砂粒・雲母微粒を含む。焼成は不良。**92** はSP62出土。弥生時代後期前半頃の甕。口縁1/6片、底部1/4片から復元。復元口径14.4 cm、器高約14 cmを測る。胎土は1 mm内外砂粒を多く含む。焼成はやや不良。**93～95** はSP69出土。**93** は中期初め頃の甕口縁部1/8片。復元口径20.4 cmを測る。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は1 mm内外砂粒・雲母粒子を含む。**94** は弥生時代前期後半の甕小片。口唇部には刻目が付く。調整はヨコナデ。色調は鈍い赤褐色を呈し、胎土は2 mm内砂粒多く含む。**95** は前期末から中期初めの甕底部。底径6.2 cmを測る。調整はナデ。色調は灰褐色を呈し、胎土は1 mm内外砂粒を多く含む。**96** はSP74出土。弥生時代後期前半の甕1/6片。復元口径は26.0 cmを測る。色調は暗灰黄色を呈し、胎土は1 mm内外砂粒多く含む。**97** はSP80出土。弥生時代後期の屈折する口縁を持つ鉢1/8片。復元口径は12.6 cmを測る。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土は3 mm内砂粒を多く含む。**98** はSP84出土。甕底部1/3片で、復元底径8.6 cmを測る。色調は赤色を呈し、胎土は1 mm砂粒を多く含む。**99～102** はSP94。**99～101** は弥生時代中期中頃

の口縁部細片。**99**は壺、**100・101**は壺。**99**はナデ調整。色調は、**99**は灰黄色、**100**は鈍い黄橙色、**101**は橙色を呈し、胎土は1～3mmの粗砂粒を多く含む。**100・101**は焼成がやや不良。**102**は壺底部1/3片で、復元底径7.2cmを測る。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土は2mm内砂粒を多く含む。**103**はSP98出土。古墳時代前期の土器部の壺1/8片で、復元口径16.0cmを測る。色調は鈍い橙色を呈し、胎土は2mm内砂粒を多く含む。**104**はSP103出土。壺の口縁部細片で胴部上半に低い三角突帯が付く。器壁は摩滅し調整は不明。色調は橙色を呈し、胎土に2mm内砂粒を多く含む。**105**はSP106出土。弥生時代中期中頃の壺。調整はやや摩滅するがナデ。色調は鈍い黄褐色を呈し、胎土は5mm内粗砂粒を多く含む。**106**はSP107出土。弥生時代前末期～中期初めの壺底部。底径9.6cmを測る。調整は底部ナデ。色調は鈍い黄褐色を呈し、胎土は3mm内砂粒を多く含む。**107**はSP131出土。弥生時代中期中頃の壺口縁小片。色調は鈍い黄橙色を呈す。胎土は3mm内砂粒を含む。**108～113**はSP139出土。**108**は鋤形口縁の壺口縁部細片。**109～112**は逆L字形口縁片。いずれも器壁は摩滅し調整不明。**111**は中期後半の壺口縁部細片。**112**は後期初めの壺口縁部1/6片。復元口径35.6cmを測る。器壁は摩滅するが、外面ハケ目が残る。内面不明。色調は**108・111**鈍い黄橙色、**109**は灰褐色、**110**は鈍い橙色、**112**は灰黄色を呈す。胎土はいずれも1～4mm内外砂粒を含む。**113**はSP191出土。中期後半の壺細片。色調は鈍い黄色を呈し、胎土は2mm内砂粒を多く含む。**114**はSP202出土。弥生時代前末から中期初めの壺底部1/2片。復元底径7.6cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土は2mm内砂粒を多く含む。**115～117**はSP203出土。**115・116**は壺口縁部。弥生時代中期前半から中頃。**115**は文様風の突帯が貼付く。**116**は1/6片で、復元口径28.8cmを測る。色調は浅黄橙色・明赤褐色を呈し、胎土も1mm内外砂粒を多く含む。**117**は穿孔のある焼粘土塊。長さ3.7cm、幅2.4cmを測る。**118**はSP205出土。弥生土器の蓋で、頂部は窪む。調整はやや摩滅するがハケ目、内面はナデか。色調は橙色を呈し、2mm内砂粒を多く含む。**119**はSP210出土。弥生時代中期初めの壺口縁部細片。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土は5mm内粗砂粒を多く含む。**120～122**はSP227出土。いずれも壺で弥生時代中期前半頃のもの。**120・121**は突帯が付く。**120**は口唇部と突帯に刻目を施す。調整は**120**はナデ、**121**の調整は外面ハケ目。色調は黒褐色・橙色・鈍い赤褐色を呈し、胎土は2mm内砂粒を多く含む。**122**はSP227出土。壺の逆L字形口縁部細片。器壁は摩滅し調整は不明。色調は鈍い赤褐色を呈し、胎土は3mm内砂粒を多く含む。**123**はSP228出土。弥生時代中期後半の壺口縁部1/8片。復元口径は32.6cmを測る。胎土は浅黄橙色を呈し、胎土は2mm内砂粒多く含む。**124・125**はSP235出土。弥生時代中期初めの壺。**124**は1/8片で、復元口径23.2cmを測る。口縁部と突帯にかすかに刻目が残る。調整はヨコナデ。色調は褐灰色・灰黃褐色を呈し、胎土は2mm内砂粒と**125**は更に雲母片を含む。**S7**はSP210出土。縄文時代後期頃と思われる縦長削片で全長5.3cm、最大幅2.5cmを測る。右側縁に使用痕が明瞭に残る。夾雜物を含む質の悪い黒曜石で、腰岳産と思われる。

(8) 土器群・包含層出土遺物(図18・写真20～23)

3区中央部～4区東側で検出した谷部を埋めた整地土と、そこで検出した土器群である。整地土は遺物包含層となり、その下の基盤面からも遺構を検出した。遺物は上・中・下層で便宜的に層を設定し取り上げた。上層が遺物の出土が一番多く、古代8世紀頃までの遺物を含む。この頃に面として整地されたのであろう。以下出土遺物の法量については紙面の都合から図右側に記す。

土器群出土遺物(図19・20、写真24) 3区中央包含層上層長軸3m、短軸長1.5mの範囲で検出。弥生時代中頃から後半の土器が多い。

126は無頸壺の口縁部1/11片。**127**は素口縁の無頸壺1/5片。色調は灰白色・明赤褐色を呈し、

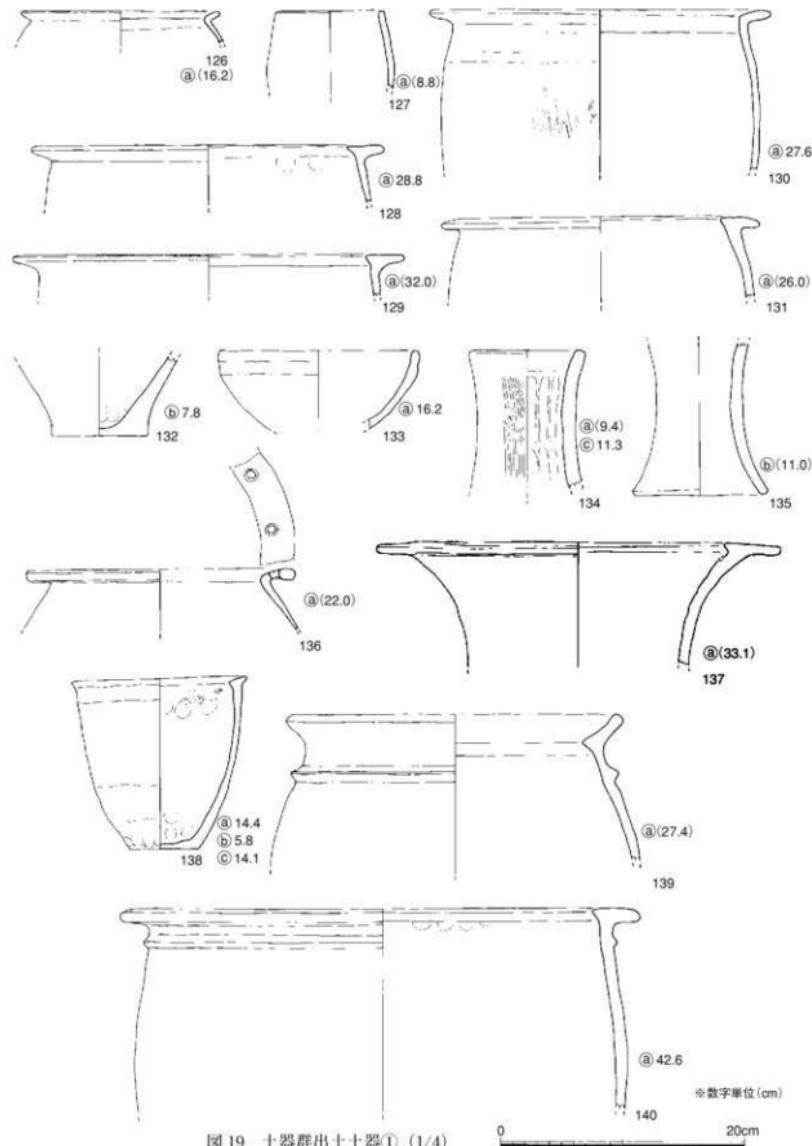


図19 土器群出土土器① (1/4)

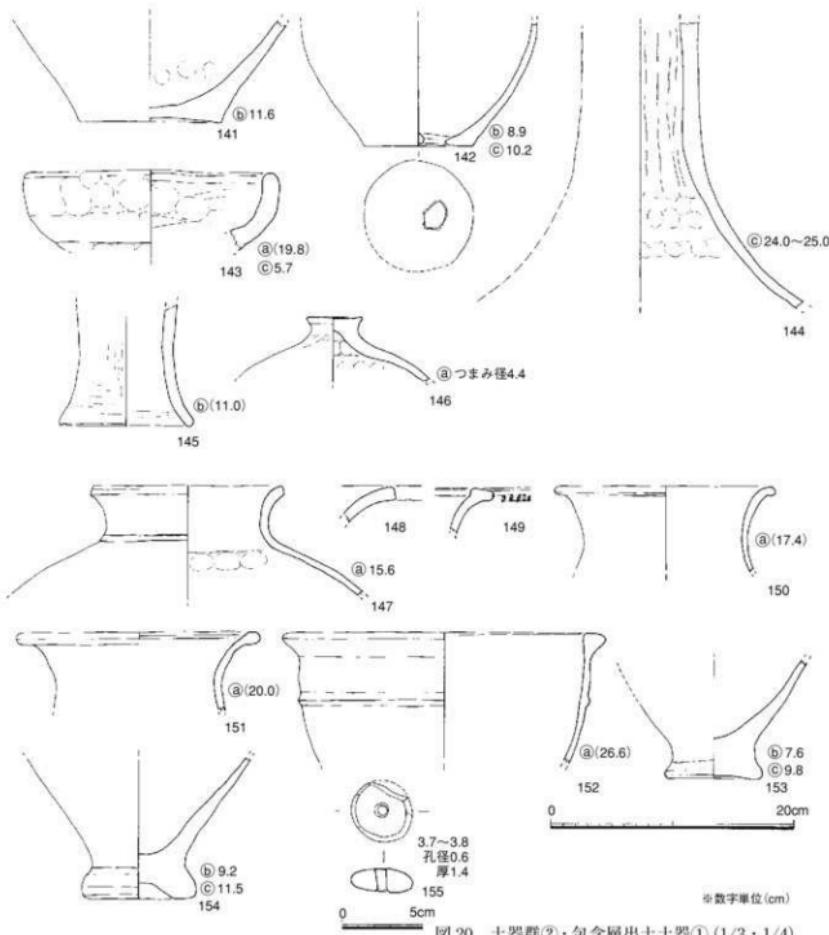


図20 土器群②・包含層出土土器①(1/3・1/4)

胎土は126が精良、127は砂粒を含む。いずれも焼成は不良。128～131は甕。128・129は鋤形口縁の1/6片。色調も灰白色を呈し、胎土も砂粒を含む。130・131は逆L字形の口縁1/8片・1/4片。130は外面ハケ目がかすかに残る。色調はいずれも灰白色で、胎土は3～5mm粗砂粒を含む。132は甕底部1/2片。色調は赤褐色を呈し、胎土は3mm内砂粒を多く含む。133は素口縁鉢1/7片。色調は灰白色を呈し、丹塗り痕が外面に残る。胎土は2mm内砂粒多く含む。134・135は胴部がくびれる中空の器台。134は上半部、135は下半部1/2片。134の調整は外面ハケ目。色調はいずれも鈍い橙色を呈し、胎土は、134は1～5mm粗砂粒多く含み、135は砂粒を含む。136～146は土器群下上層出土。

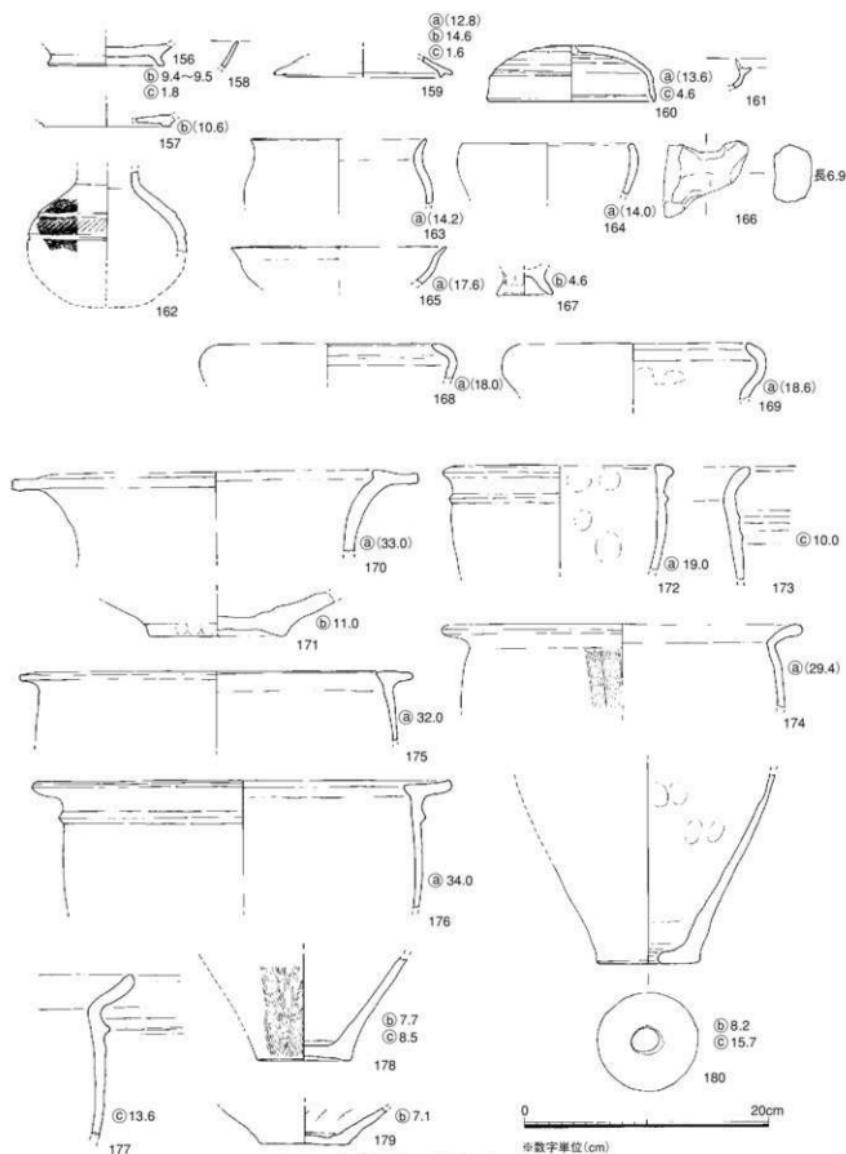


図21 包含層出土土器② (1/4)

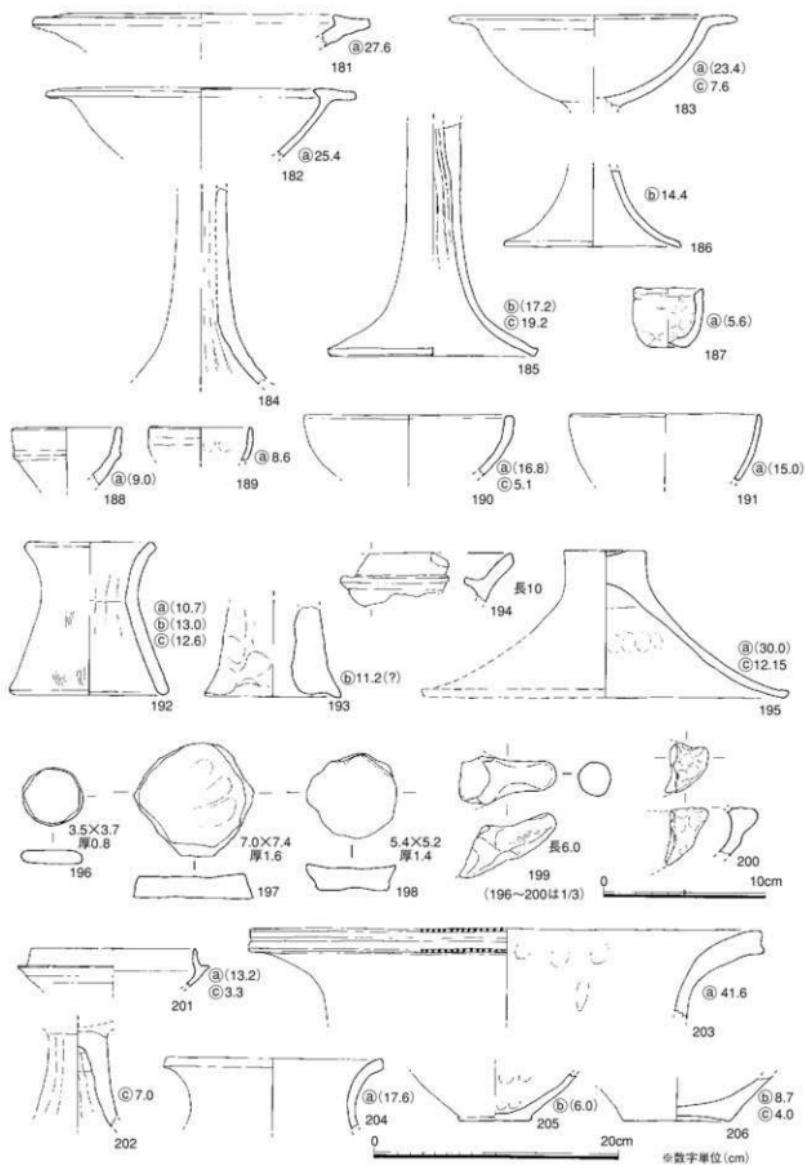


図22 包含層出土土器③ (1/3・1/4)

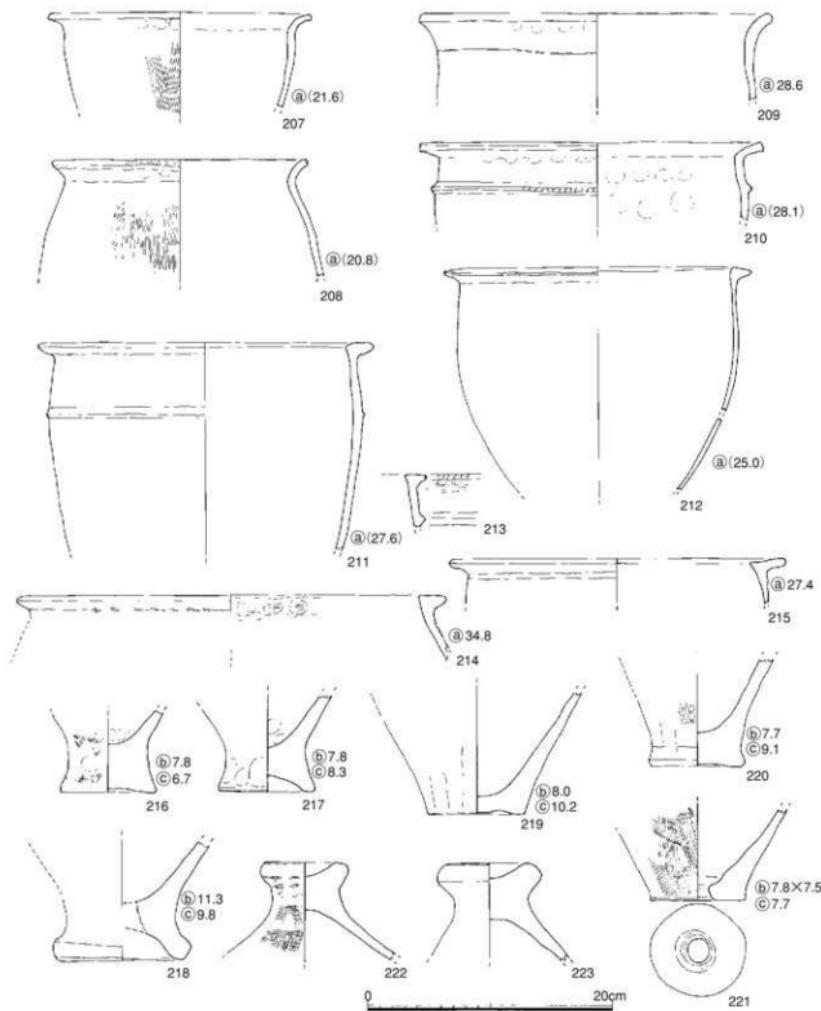


図23 包含層出土土器④ (1/4)

※数字単位(cm)

136・137は壺。136は無頸壺1/6片。口縁部には蓋を付けるための円形の組孔が2カ所ある。137は鋤形口縁の1/2片。色調は、136は二次焼成を受けたようで純い橙色を呈し、137は黄褐色を呈す。胎土はいずれも1~4mm内粗砂粒多く含む。138~142は壺。138は小型の壺で胴部内面にはハケ目

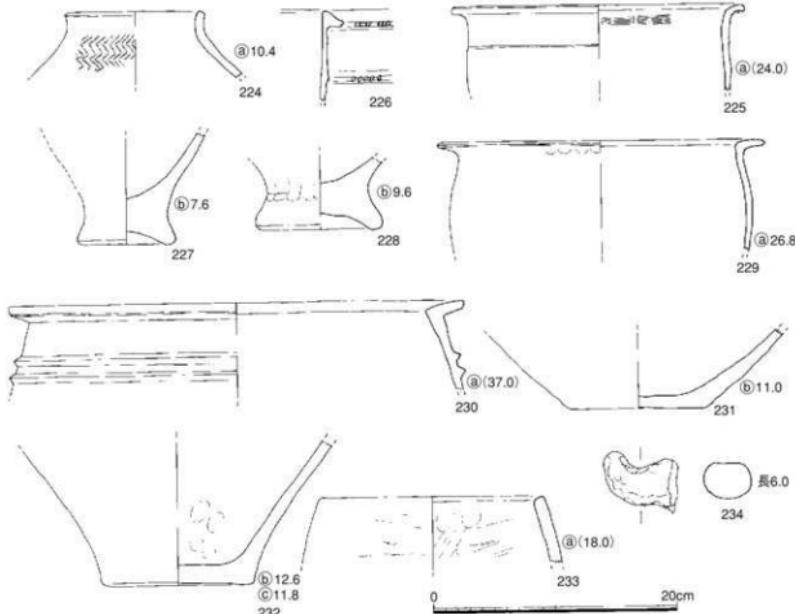


図24 包含層出土土器⑤ (1/4)

が残る。139は1/6片で後期初めのもの。140は1/8片で、中期中頃のもの。色調は、138は明赤褐色、139は淡橙色、140は灰白色を呈し、胎土は138は1mm内砂粒少量、139は3mm内外粗砂粒多く、140は5mm内外粗砂粒多く含む。141・142は底部。142は底部に穿孔がある。色調は、141は灰白色、142は橙色を呈し、胎土はいずれも1mm内外砂粒を少量含む。143は手捏ねの厚手の鉢1/3片。工具ナデと指押え痕が残る。色調は褐灰色を呈し、胎土は2mm内砂粒を多く含む。144は筒形器台の脚部。調整は内面シボリ痕と指押え痕が残る。色調は鈍い橙色で外面丹塗り痕跡が部分的に残る。胎土は5mm内外粗砂粒を多く含む。145は器台の底部1/6片。調整はやや摩滅するがナデ又はヨコナデ。色調は明黄褐色を呈し、胎土は1mm内砂粒・赤色粒子・雲母粒子を含む。146は天井が摘み状にくびれた蓋。内面に指押え痕が残る。色調は浅黄褐色を呈し、胎土は精良。

包含層（整地土）出土遺物（図20～24・26、写真25・26）

147～156は3区谷部東側の整地土（包含層）上層の黒褐色～暗褐色焼土混じり層から出土した遺物。147～151は壺。147は弥生時代前期終わり頃の壺。頸部に2条の沈線が巡る。色調は灰白色を呈し丹塗り痕跡が残る。胎土は砂粒・赤色粒子を多く含む。148・149は口縁部細片。149は鋸形口縁で口唇部にヘラの刻目が付く。色調は鈍い黄橙色・灰黄褐色を呈し、胎土はいずれも2mm内砂粒を多く含む。150・151は口頸部が外反する壺口縁部1/4片・1/2片。色調はいずれも灰黄色を呈し、胎土は150は5mm内砂粒、151は1～2mm砂粒を多く含む。152は中期初めの壺1/2片。胴部に三角突帯

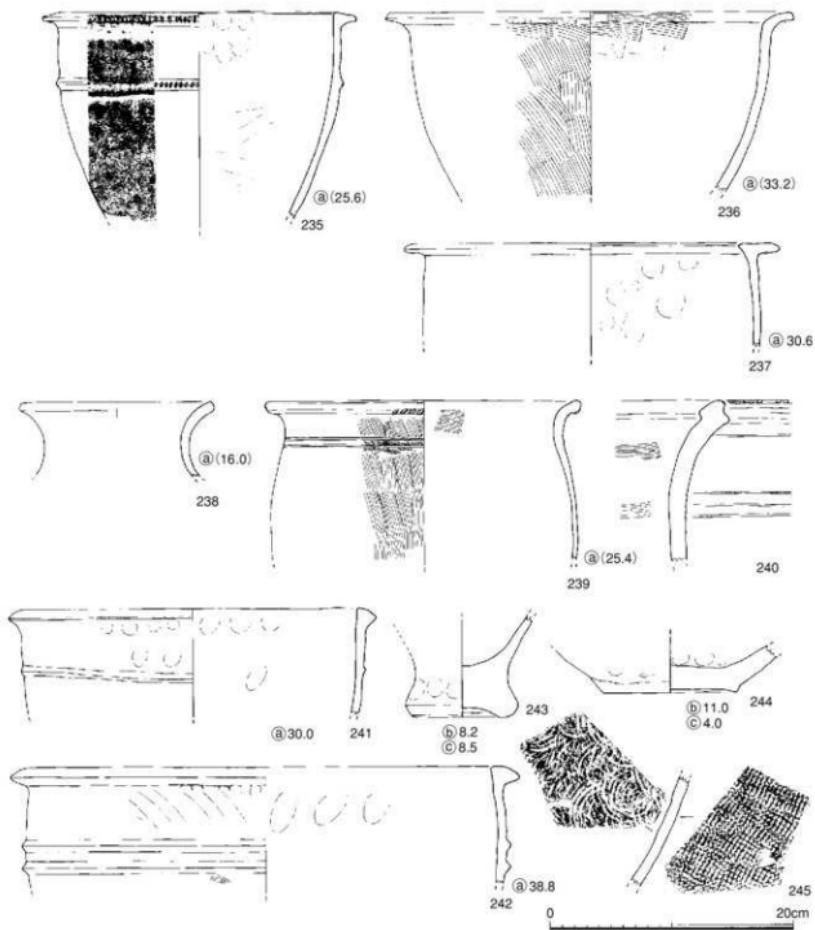


図25 遺構面出土土器 (1/4)

を巡らす。色調はオリーブ褐色を呈し、胎土は2mm内砂粒・金雲母粒子を多く含む。**153・154**は上げ底の底部。色調はいずれも鈍い橙色を呈し、胎土は2mm内砂粒を多く含む。**155**は算盤形の紡錘車。色調は褐色を呈し、胎土は精良。

156～199は上層出土。156～162は須恵器。156・157は高台坏底部。157は1/6片。7世紀後半と8世紀後半のもの。調整は回転ヨコナデ。色調は灰色・灰黄色を呈し、胎土は、156は2mm内砂粒多く含み、白色微粒・雲母微粒を少量含む。158は坏口縁部細片。調整は回転ヨコナデ。色調は灰

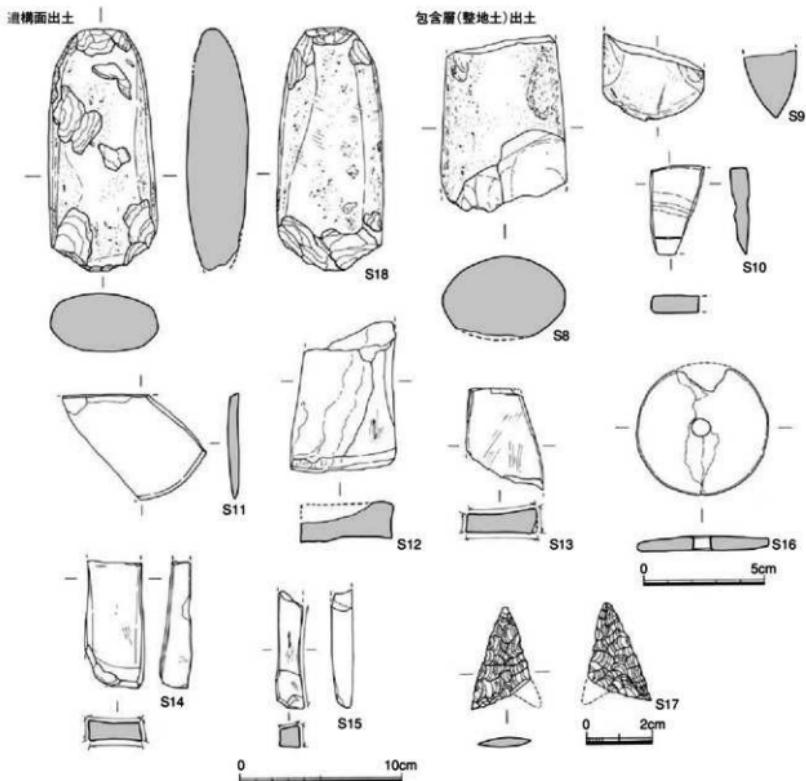


図26 各遺構出土石器 (2/3・1/2・1/3)

色を呈し、胎土は精良。159はⅤ期の坏蓋1/4片。160はⅡ期の坏蓋1/4片。いずれも調整は回転ヨコナデ、天井部は回転ヘラケズリ。161は坏身細片。色調はいずれも灰色を呈し、胎土はいずれも精良。162は脛胴部1/6片。胴部上半は2条の沈線が巡りその間は櫛目が入る。色調は灰色を呈し、胎土は精良。163～168は土師器。163は壺の口縁部。164は鉢口縁1/10片。色調は鈍い橙色を呈し、胎土は、163は1～3mm砂粒を多く含み、164は2mm内砂粒・雲母・赤色粒子を含む。165は屈折する口縁の鉢口縁部。色調は黄橙色を呈し、胎土は精良。166は把手。167は小型の脚台坏鉢底部。手捏ねで調整はナデ。色調は淡橙色・明赤褐色を呈し、胎土は166は3mm内砂粒を含む、167は5mm内砂粒を含む。168～171は弥生土器。168～171は壺。168・169は袋状口縁壺の口縁部1/6片・1/10片。調整は168がナデ、色調は鈍い黄橙色・浅黄橙色を呈し、胎土は、168は2mm砂粒を多く含み、169は精良。170は鉗形口縁1/2片。171は底部片。色調は灰白色・灰褐色を呈し、胎土は170は3mm内砂粒を多く含む。172～179は中期初めから後半にかけての壺。172は1/5片で胴部上半に突帯が1条巡る。173は口縁が斜めに開き、胴部には2条の突帯が巡る。色調は灰黄褐色・明褐灰色を呈し、胎土は

172は5mmの粗砂粒、173は2~3mm砂粒を含む。174は口縁部がやや「く」字状を呈す形態の1/6片。器壁は摩滅するが胴部外面はハケ目。色調は橙色を呈し、胎土は1mm内外砂粒を多く含む。175は逆L字形の口縁部1/6片。色調は鈍い橙色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は不良。176・177は1/2片と小片。頸部に突帯を1条巡らす形態で、色調は鈍い橙色、胎土は176が細砂粒を含み、177は1~5mm粗砂粒を多く含む。178・179は底部。178の調整は外面ハケ目。179は壺の底部か。内面には工具痕が残る。色調は178が鈍い黄褐色、179は灰白色を呈し、胎土はいずれも3mm内砂粒を多く含む。180は甕を転用した瓶。底部に径2.3×27cmの円孔が焼成前に穿たれ、割口は調整されている。内面の調整はナデで指押え痕が残り、外底部はナデ。色調は灰オリーブ褐色で底部は黒斑がある。胎土は1~3mm粗砂粒を多く含む。181~186は高坏。181~183は坏部。181・182は瓢形口縁部1/8片・1/6片。183は1/4片で口縁が屈折して伸びる形態。182の調整はヨコナデ。色調は181が灰黄褐色、182・183は橙色を呈し、181は砂粒・金雲母微粒を含み、182は精良。183は1~3mm砂粒多く含む。焼成は182・183が不良。184~186は脚部。184・185は長脚で、185は1/2片。いずれも内面にはしづり痕と外面丹塗りの痕跡が残る。186は大きく開く脚部1/6片。色調は灰黄色を呈し、胎土は精良、焼成は不良。187~191は鉢。187は手捏ねの鉢1/3片。内外面調整はナデ。188~192は素口縁の鉢。188は1/6片で体部に低い三角突帯が巡る。189は1/7片、190は1/3片、191は1/4片。色調は187は橙色、188・191は鈍い黄橙色、189は灰色、190は灰黄褐色を呈し、外面黒斑がある。胎土は187・189は精良、188は2mm内砂粒多く含み、190は1mm内外砂粒多く含み、191は3mm内砂粒を多く含む。192は器台1/3片。調整はハケ目がかすかに残る。色調は明褐色を呈し、胎土は1mm内外砂粒多く含む。193は支脚で指押え痕が残る。色調は橙色を呈し、胎土は3mm内砂粒を含む。194は瓢形土器の体部細片。丹塗りの痕跡がある。色調は鈍い赤褐色を呈す。195は蓋1/2片で天井部は中窪みする。色調は鈍い褐色を呈し、口縁部内にはスグが付着し、胎土は1~3mm砂粒を多く含む。196~198は土器片利用の土製円板。調整は197が指ナデで、196・198は摩滅し不明。色調は196・198が灰白色、197は灰黄色を呈し、胎土はいずれも2mm内砂粒を含む。199はサジの把手。残存長6cmを測る。調整はナデ。色調は橙色を呈し、胎土は精良。200は不明土製品の一部。指押え仕上げ。皮袋形土製品かミニチュア土器の一部か。色調は灰黄色を呈し、胎土は精良。

201・202は中層出土。201はⅢA期の須恵器坏身1/6片。調整は回転ヨコナデ。色調は灰色を呈し、胎土は精良。202は弥生土器の高坏脚部。器壁は摩滅するがナデか。内面シボリ痕が残る。色調は橙色を呈し、胎土は1mm内細砂粒を含む。

203~223は下層出土。203~206は弥生土器の壺。203は口縁部1/12片。口唇部は肥厚し、両端に刻目が付く。調整はナデ。色調は鈍い橙色を呈し、胎土は2mm内砂粒を多く含む。204は1/5片。色調は灰白色を呈し、胎土は1mm以下砂粒・雲母を含む。205・206は底部。205は1/2片。調整は内面ナデ。206もやや摩滅するがナデ調整。色調は205は鈍い橙色、206は鈍い黄橙色を呈し、胎土は205は精良、206は3mm内粗砂粒多く含む。207~220は弥生時代前期中頃~中期中頃の甕。207~209は如意形口縁の甕。207は1/4片で、調整は外面ハケ目。色調は灰褐色を呈し、胎土は1~3mm砂粒多く含む。208は1/10片。口唇部には刻目が付く。調整は外面はハケ目。色調は鈍い褐色を呈し、胎土は3mm内砂粒を含む。焼成は不良。209は1/6片で、色調は灰黄色を呈し、胎土は2mm内砂粒を多く含む。210・211は逆L字形口縁部の甕でいずれも胴部に1条の突帯を巡らす。210は1/8片で、断面台形の突帯で刻目が付く。調整は外面ヨコナデ、内面は摩滅するが指押え痕が残る。色調は褐灰色を呈し、胎土は5mm内砂粒を多く含む。211は1/5片で、断面三角の小さな突帯を巡らす。色調は

灰白色を呈し、胎土は2mm内砂粒を多く含む。**212～214**は口縁断面が三角形を呈す城ノ越期の壺。**212**は1/2片。胴部が丸味を持つ形態。**213**は細片で胴部に1条の突帯が付く。口唇部には刻目が付く。**214**は1/5片。**213**の口縁下には指押え痕が残る。色調は**212**は鈍い黄褐色、**213**は黒褐色。**214**は灰白色を呈し、胎土は**212**は1mm内外砂粒、**213**は1mm内砂粒、**214**は2mm以下砂粒をいずれも多く含む。**214**の焼成はやや不良。**215**は須玖1式の壺口縁1/7片。色調は橙色を呈し、胎土は3mm以下砂粒を多く含む。焼成は不良。**216～220**は壺の底部。**216～218**は底部は厚手で上げ底。**216**は調整はハケ目とナデ。**217**の調整はナデ。色調は灰黄褐色・鈍い黄褐色・鈍い橙色を呈す。胎土は1～2mmの砂粒を含む。**219・220**は僅かに上げ底の底部。**219**の調整はナデで、**220**はハケ目が残る。**221**は底部に円孔を持つ壺。調整は外面ハケ目で内面はナデ。円孔は径2cmで焼成前穿孔である。色調は灰黄色を呈し、胎土は1mm内砂粒を少し含む。**222・223**は蓋。天井部が摘み状に縫れ、頂部が窪む形態。調整は**222**は外面ハケ目とナデ。色調は**222**は鈍い橙色、**223**は灰黄色を呈す。胎土は砂粒を含む。**223**の焼成は不良。

224～234出土層位不明。**224**は弥生時代前期後半の口縁が直立する壺。外面貝殻腹縁による羽状文とナデ調整。色調は灰褐色を呈し、胎土に3mm内砂粒を多く含む。**225～228**は前期後半～中期初めの壺。**225**は如意形口縁で胴部に1条の沈線が巡る。器壁はやや摩滅するが調整はナデか。口縁内面はハケ目。色調は灰黄褐色を呈し、外面黒斑がある。**226**は中期初め頃のもので、胴部に突帯が付く。口唇部と突帯には刻目が施す。色調は鈍い黄橙色を呈す。胎土は**225・226**共1～2mm砂粒を多く含む。**227・228**は上げ底の底部。色調は明赤褐色・浅黄橙色を呈す。胎土は3～4mm内砂粒を多く含む。**229～231**は中期中頃～後半の壺。**229**は1/8片。**230**は1/10片。胴部に2条の突帯を持つ。色調は浅黄橙色・明黄褐色を呈し、胎土は**230**は2mm内砂粒、**230**は4mm内砂粒を多く含む。**231・232**は壺底部。**232**の内面には指押さえ痕が残る。色調は浅黄橙色・鈍い黄褐色を呈し、胎土に2mm内砂粒を含む。**233**は高杯の坏部か口縁が内傾する口縁部1/8片。調整はやや摩滅するがナデ。後期のもの。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成不良。**234**は古墳時代後期の土師器の把手。器壁はやや摩滅するが調整はナデ。色調は鈍い黄橙色で、胎土は精良で微砂を含む。

S8～S17は各層から出土した石器。**S8・S9**は磨製石斧。**S8**は基部片。残存長10.7cm、最大幅7.9cmを測る。**S9**は刃部片。いずれも表面は丁寧な研磨調整であるが、**S9**は後世の傷や摩滅が著しい。石材は**S8**は安山岩？。**S9**は玄武岩。**S10**は扁平片刃石斧片。残存長3.6cm、幅2.1cmを測る。表面は研磨調整であるが摩滅がひどい。石材は頁岩。**S11**は大形の石庖丁片。残存幅8.9cm、最大幅6.4cmを測る。表面は未研磨の状態で、刃部のみ研ぎ出す。石材は堆積岩系の粘板岩か。**S12～S15**は砥石。**S12**は欠損が著しい。残存長9.4cm、最大幅6.6cmを測る。上面と左右側面が砥面である。**S13**は扁平な形状で、残存長6.15cm、最大幅4.8cmを測る。上下・左右各面を使用。**S14**は残存長7.8cm、最大幅3.7cmを測る。上下・左右4面を使用。石材は**S12**は砂岩、**S13・S14**は粘板岩。**S15**は方柱状の砥石。残存長7.3cm、最大幅1.3cmを測る。上・左右3面を使用。石材は頁岩で片刃石斧からの転用か。**S16**は円板状の紡錘車。直径5.4cmを測る。丁寧な研磨調整であるが、表面の剥離が著しい。色調は鈍い黄橙色を呈す。石材は粘板岩系。**S17**は四基の石鍬。鍬身長3.2cmを測る。表面は調整を丁寧に加える。石材は黒曜石。

(9) 遺構面出土・表採遺物（図25・26、写真26）

235～237は3区遺構面出土。いずれも壺で弥生時代前期末から中期中頃のもの。**235**は1/5片で、胴部に低い突帯が付く。口唇部と突帯にはヘラによる刻目を付ける。調整はヨコナデ。色調は

暗灰黄色を呈し、内外面部分的にススが付く。胎土に1mm内細砂粒を多く含む。**236**は広口の壺1/4片。内外面調整はハケ目とナデ。色調は暗灰黄色を呈し、ススが内外面付着する。**237**は1/6片。内外面黒色顔料が塗られたように黒い。調整はナデ。焼成は良好。**235・237**共胎土に1mm内砂粒を含む。**238～245**は3区で出土状況が不明の遺物。**238**は壺1/6片。弥生時代前期後半頃のもの。**239～242**は壺。**239**は1/5片。前中期末頃のもので、口唇部に刻目が付く。頸部に2条の沈線が巡る。調整は外面ハケ目、内面はナデ。**240**は金海式壺棺の口縁部小片。頸部に4条の沈線が巡る。調整は外面丁寧な平滑なナデ、内面やや摩滅するがヨコの粗いハケ目が残る。**241・242**は中期前半のもの。**241**は口縁部1/7片で、調整は外面ヨコナデ、内面には指押さえ痕らしき凹みがある。色調は褐色を呈し、焼成は不良。**242**は1/10片。胴部に2条の断面三角が巡る。調整は斜めの細かいハケ目とナデ、内面ナデで指押さえ痕が残る。色調は鈍い褐色を呈す。**243・244**は底部。**243**は中期初め頃のもの。調整は内外面ナデ。色調は灰黄橙色を呈す。**244**は壺の底部で僅かに上げ底。器壁はやや摩滅するが、調整外ナデ、内面は不明。色調は灰白色を呈し外面には赤色顔料の痕跡が残る。**245**は須恵器の壺胴部片。外面格子目タタキで、内面同心円状の當て具痕が残る。

S18は大型蛤刃石斧。刃部と基部を欠損する。表面は研磨仕上げであるが敲打調整痕が残る。表面には鉄分が付着する。石材は玄武岩。



写真1 調査区遠景（東から）



写真2 調査区全景（東から）



写真3 調査区全景（東から）

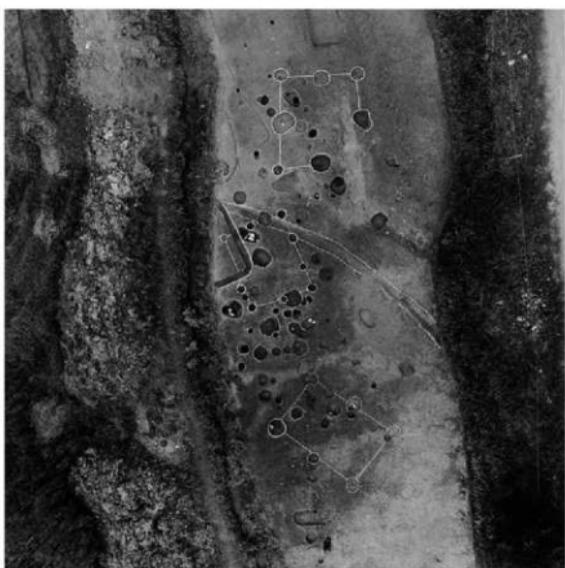


写真4 SB01～03、SC01、SC02（東から）



写真5 SA01・02、SB05、SD04（北から）

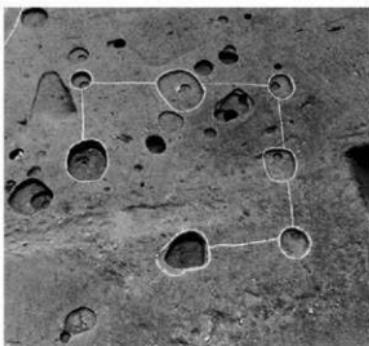


写真6 SB01（北から）

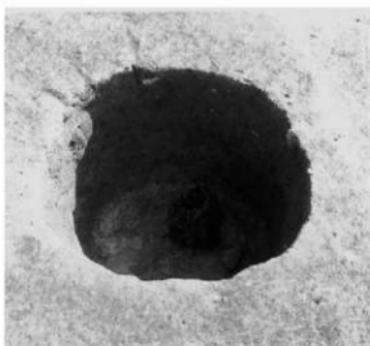


写真7 SB01 柱穴 SP35 で検出した柱根

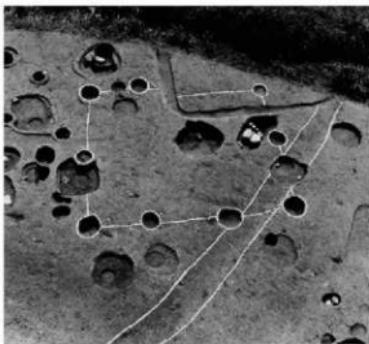


写真8 SB02（北から）

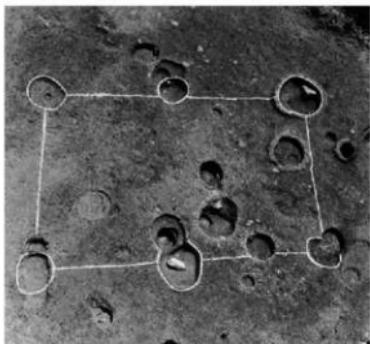


写真9 SB03（北西から）

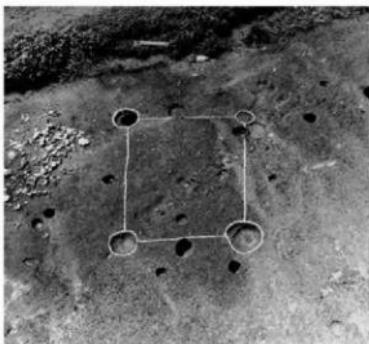


写真10 SB04（北から）

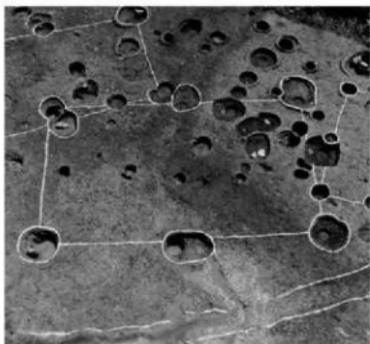


写真11 SB06（北西から）

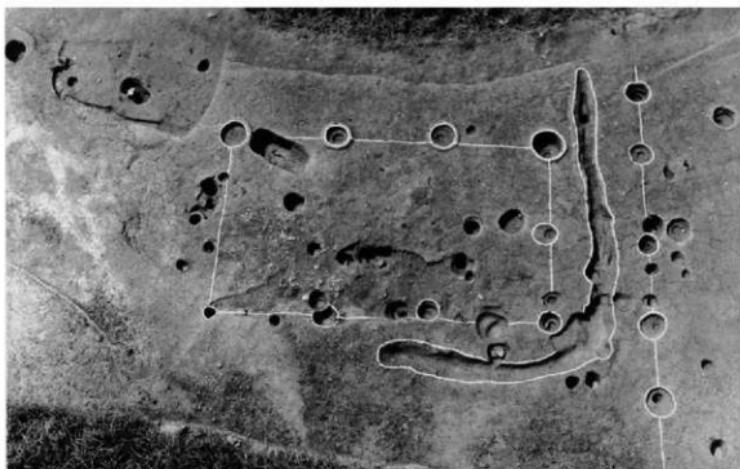


写真12 SB05とSD04(北から)

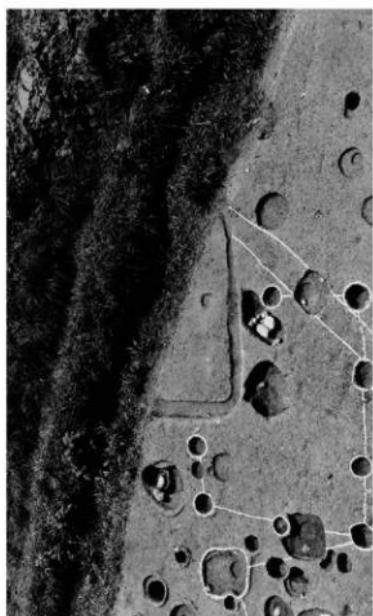


写真13 SC01(北から)



写真14 SC02(北から)



写真 15 SK05（東から）



写真 16 SK06（西から）



写真 17 SK07（東から）



写真 18 SK10（北から）



写真 19 鉄滓ピット SX06（北から）



写真20 包含層（整地土）西側掘り下げ状況（東から）

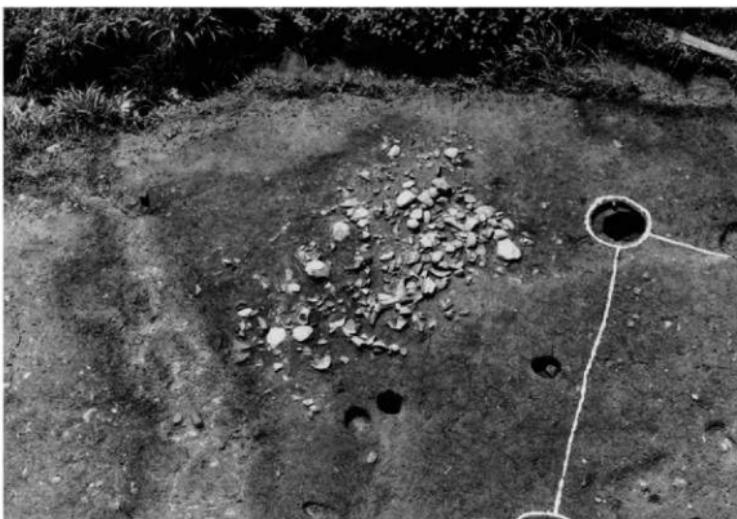


写真21 土器群検出状況（北から）



写真22 包含層（整地土）掘り下げ状況（東から）



写真23 包含層土層状況（東から）

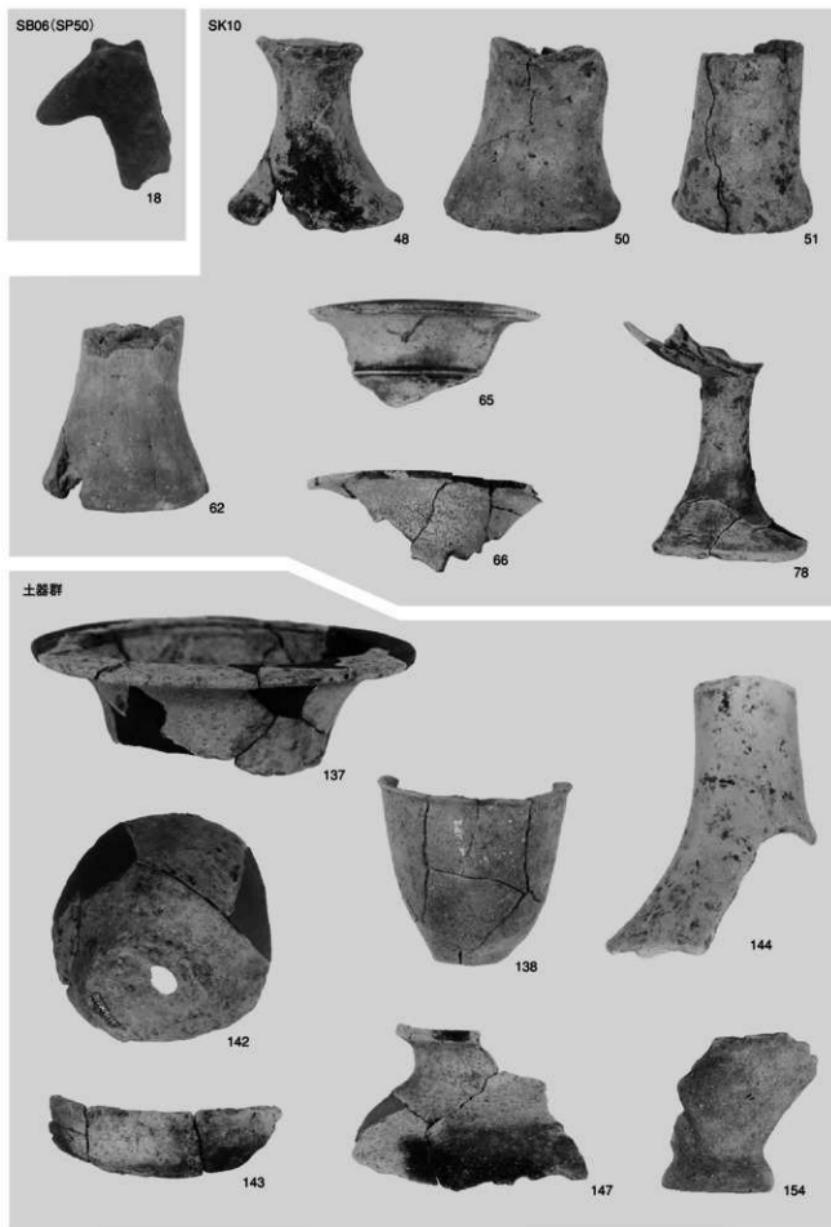


写真24 各遺構出土遺物① (縮尺不統一)

包含層



写真25 各遺構出土遺物② (縮尺不統一)

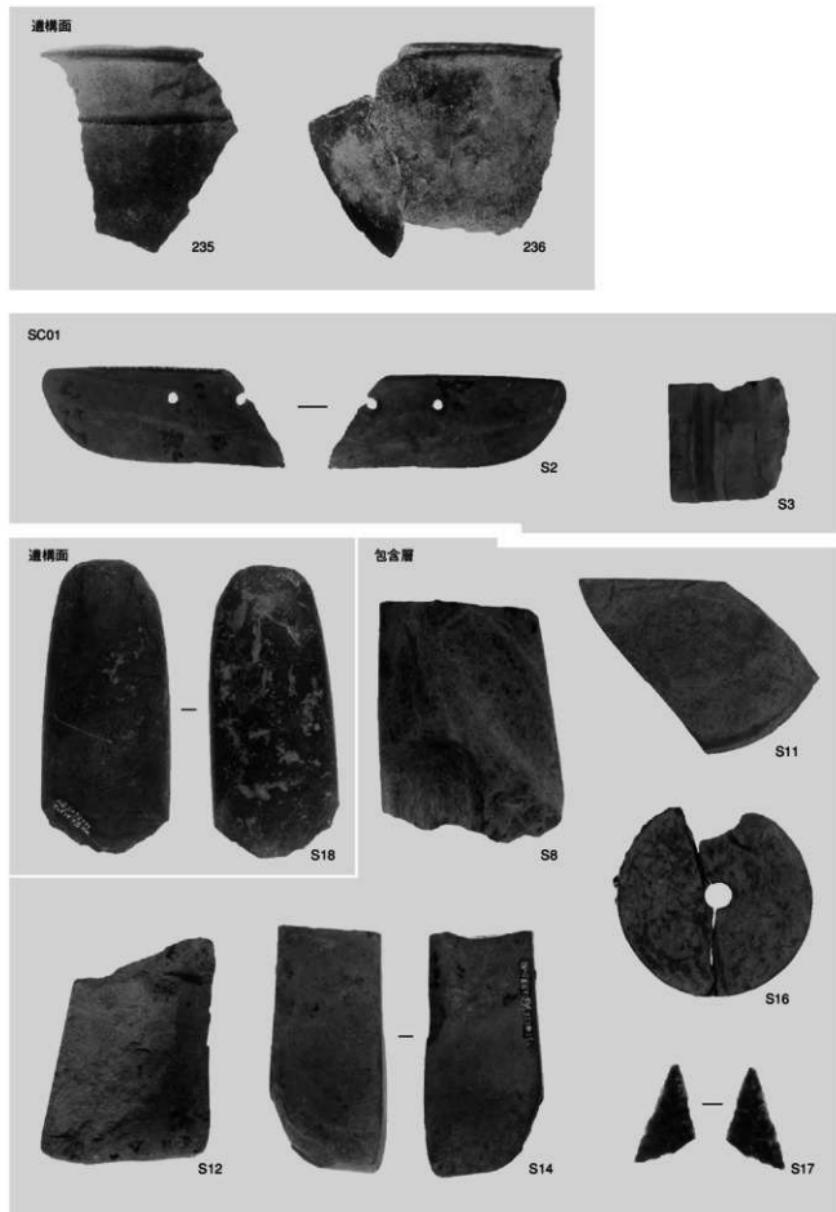


写真 26 各遺構出土遺物③（縮尺不統一）

第IV章 大北遺跡群第1次調査

1. 調査の概要 (図27、写真27~30・50)

調査地は福岡市西区大字金武字大北に所在する。飯盛山から派生する台地（扇状地）の縁辺部に立地する。吉武遺跡群とは深い谷を挟んで南側に対峙している。大北遺跡群としては初めての調査であったが、これ以後も調査は実施されていない。遺跡地内の南側高所部には中世の都地城がある。都地城は連郭式の方形曲輪を持つ館城であり、地元の伝承では室町時代の天文元年（1532）、幕府から西国鎮圧の命を受け、早良郡金武村に到った細川若狭守の居城であったとされる。

今回の発掘調査は工事区域内の道水路や削平部分について行なった。調査期間は7月25日から9月16日迄である。調査実施面積は470 m²。調査地の現状は畠地と水田で、標高は21~22 mを測る。遺構面迄の堆積土は0.2~0.5 m厚で、堆積土は東壁では水田耕作土である。遺構面は明黄褐色~黃橙色の粘土で、調査区の東側には深い谷が入り込む。遺構面は南から北へ低くなり、南側は削平により遺構は少ない。主な検出遺構は溝、土坑、ピットなどで、時期は弥生時代~中世が中心となる。調査では多量の鉄滓が出土したが、整理作業の都合から手が回らず、詳細については不明である。

2. 遺構と遺物

① 溝状遺構 (SD)

6条検出した。いずれも小溝で、残りは悪い。

SD01 (写真33)

北東側で検出した小溝。規模は全長4.38 m、最大幅0.76 m、最大深さは2~4 cmと浅い。埋土は灰褐色粘質土で、黄褐色ローム土ブロックを混入する。

出土遺物 (図29) 弥生土器や古墳時代頃の土師器・須恵器の細片、鉄滓が少量出土。1点図示するが、必ずしも遺構の時期を示す物ではない。1は須恵器の壊身細片。口縁端部を欠損する。調整は回転ヨコナデ。色調は灰色。6世紀頃のもの。

SD02 (図28)

調査区中央部西側で検出した小溝。確認長11.8 m、溝幅0.2~0.4 m、深さ8~16 cmを測る。埋土は暗灰黄色粘質シルトでマンガン粒子多く含む。出土遺物は弥生土器や古墳時代~古代土師器、須恵器細片、黒色土器、黒曜石剣片が出土。量は少なく、細片で図示出来ない。

SD03 (図28、写真34)

調査区東側で湾曲して東西に延びる小溝。段落ち部とSD02まで続き消滅する。確認長15 m、幅0.4~0.6 mで、深さは4 cmほどで浅い。埋土は暗灰黄色粘質土から黒褐色粘質土。SD02と埋土は近い。底面から鉄滓塊が多数出土した。

出土遺物 (図29) 古代の須恵器、中世の土師器、黒色土器、中国産白磁・青磁、鉄滓が出土。2・3は竜泉窯系青磁碗I類の割花文碗。2は口縁部細片。3は底部1/6片。復元底径5.6 cmを測る。いずれもオリーブ灰釉がかかる。3の外底は露胎。4は白磁碗XII-1類の底部1/6で、底径6.0 cmを測る。外底は浅くケズリ出し、全面に灰黄褐色釉がかかるが、発色が悪い。5は土師器壊口縁部1/6片で、復元口径15.4 cmを測る。器壁は摩滅し調整は不明。色調は鈍い黄橙色を呈し、焼成は不明。

— 大北遺跡群第1次調査 —

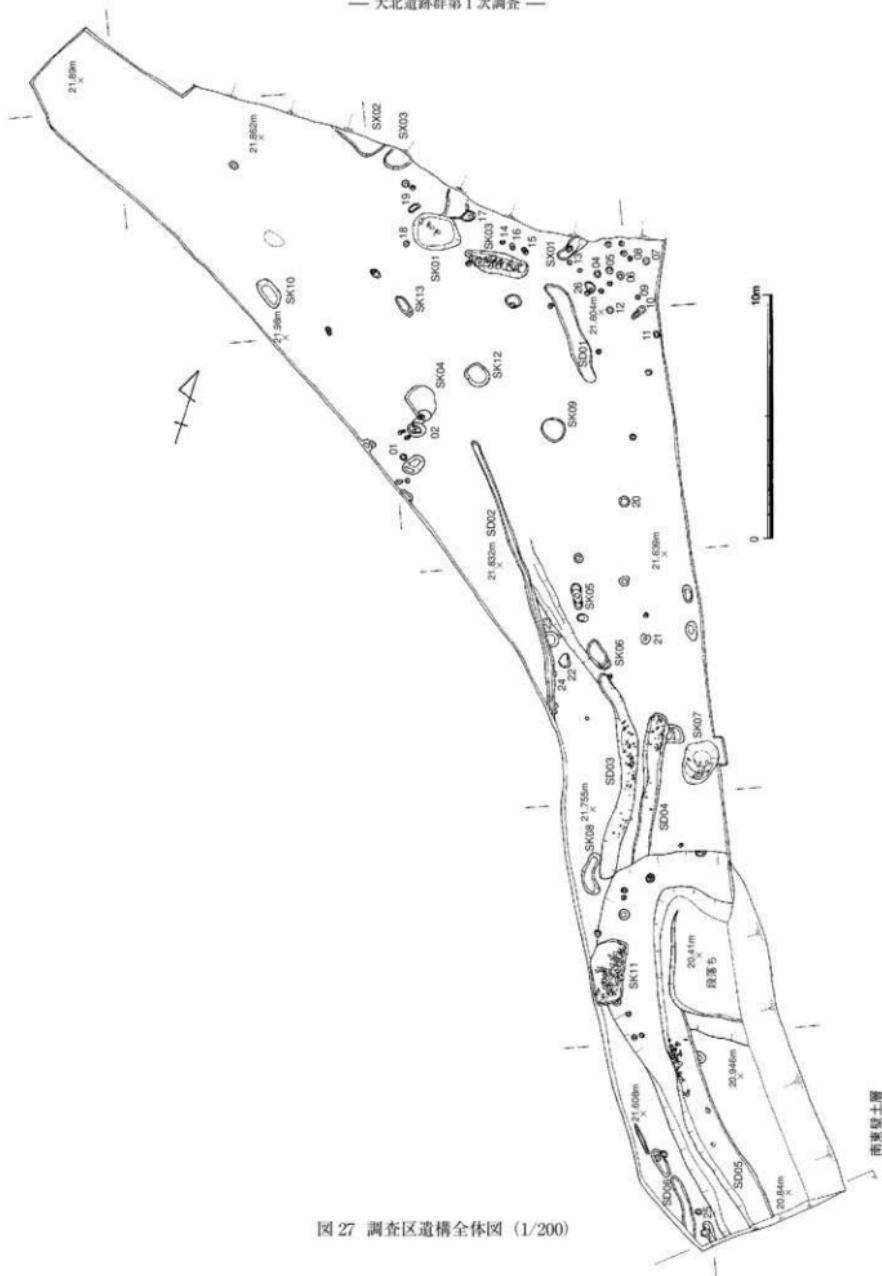


図 27 調査区遺構全図 (1/200)

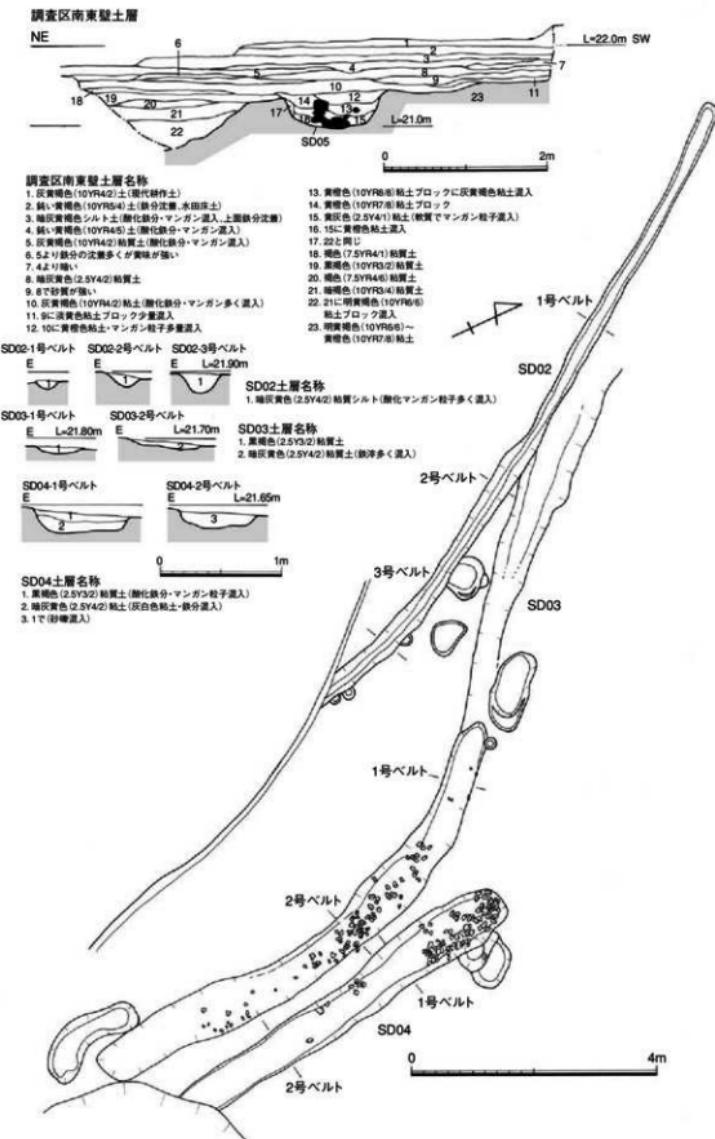


図28 SD02～04、調査区段落ち部南東壁土層 (1/40・1/60・1/80)

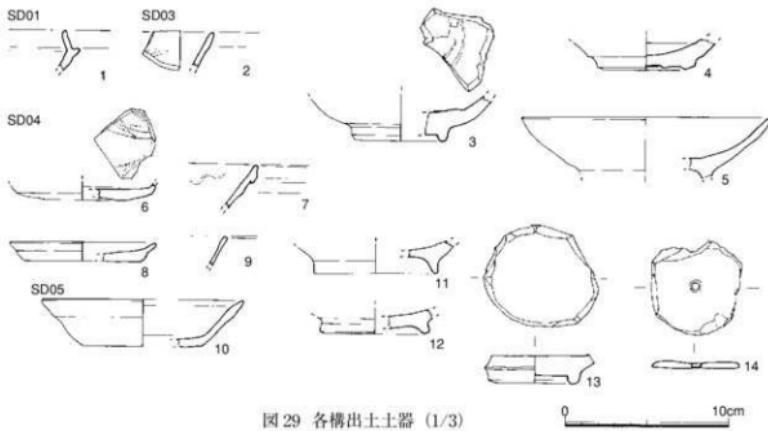


図29 各構出土土器 (1/3)

0 10cm

SD04 (図28、写真35)

SD03の東側に並行する溝。東側は段落ちになる。確認長6.3cm、幅0.6~0.8m、深さ0.15~0.2mを測る。埋土は黒褐色粘土が主体で、酸化鉄分・マンガン粒子を混入し、下層は暗灰黄色粘土で、砂礫を含む。西側先端部には鉄滓塊や炉壁塊などが床面から多く出土した。

出土遺物 (図29) 弥生土器や古代の土師器・須恵器、中世土師器、黒色土器、白磁・青磁などが出土したが、細片が多い。6は同安窯系青磁皿II類底部1/4片で、復元底径4.8cmを測る。見込みは割花文と櫛刺突文。オリーブ灰釉がかかるが、外底は露胎。7は白磁碗。玉縁口縁のIII類と思われる口縁部細片。灰黄褐色釉がかかるが発色は悪く、内面釉が垂れている。8は土師器皿小皿1/6片。復元口径9.0cm、器高1.15cmを測る。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土は1mm前後砂粒を多く含む。9は黒色土器A類の口縁部細片。色調は内面暗青灰色、外面灰白色を呈し、胎土は精良。

SD05 (図28、写真31・36)

調査区南側段落ち裾に沿って延びる溝。この溝の北側は谷部に向かって下がっていく。確認長は14m、幅・深さは東壁で1.35m・0.45mを測る。埋土は上層が灰黄褐色や黄橙色の粘土、下層は黄灰色粘土が主体で、酸化鉄分・マンガン粒子が沈着している。礫石が流れ込んでいる部分もあった。

出土遺物 (図29、写真51・52) 弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、中世土師器、青磁・白磁、砥石、鉄滓などが出土。10は口縁部口禿の白磁皿XI類。口縁部1/5片で、復元口径12.4cm、器高2.9cmを測る。素地の調整はケズリでオリーブ灰色釉がかかる。11は土師器椀底部1/4弱片。復元高台径7.6cmを測る。器壁は摩滅し調整は不明。色調は灰褐色を呈し、胎土は精良。12は瓦器椀底部1/6片。復元高台径6.6cmを測る。器壁は摩滅し調整は不明。色調は灰色を呈し、胎土は1mm前後を少量含み、焼成はやや不良。13は青磁碗底部利用の円板か。6.2×7.0cmを測る。表面オリーブ灰釉がかかるが、外底部はケズリで露胎。14は土師器皿小皿底部転用の紡錘車。一部欠けるが、5.5×5.8cm、厚み0.5cmを測る。表面は摩滅し調整は不明。色調は鈍い橙色を呈し、胎土は精良。

S1は平面長方形の砥石。長軸長14.0cm、短軸幅11.8cm、最大厚5.7cmを測る。表面は敲き調整後磨り仕上げで、上下、下側面は砥面として使用している。また上下両面には敲打具による敲き痕跡が残る。色調は黄味がかった灰白色で、石材は粒子の密な砂岩か。

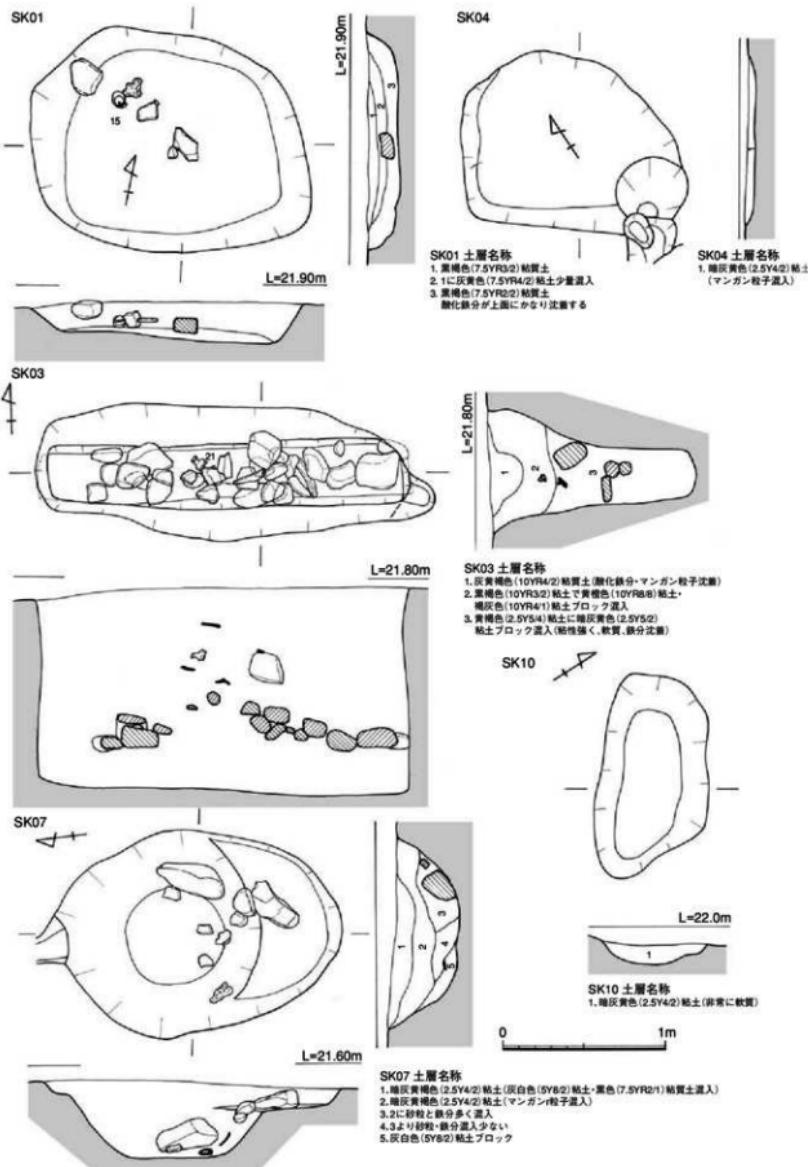


図30 SK01・03・04・07・10 (1/30)

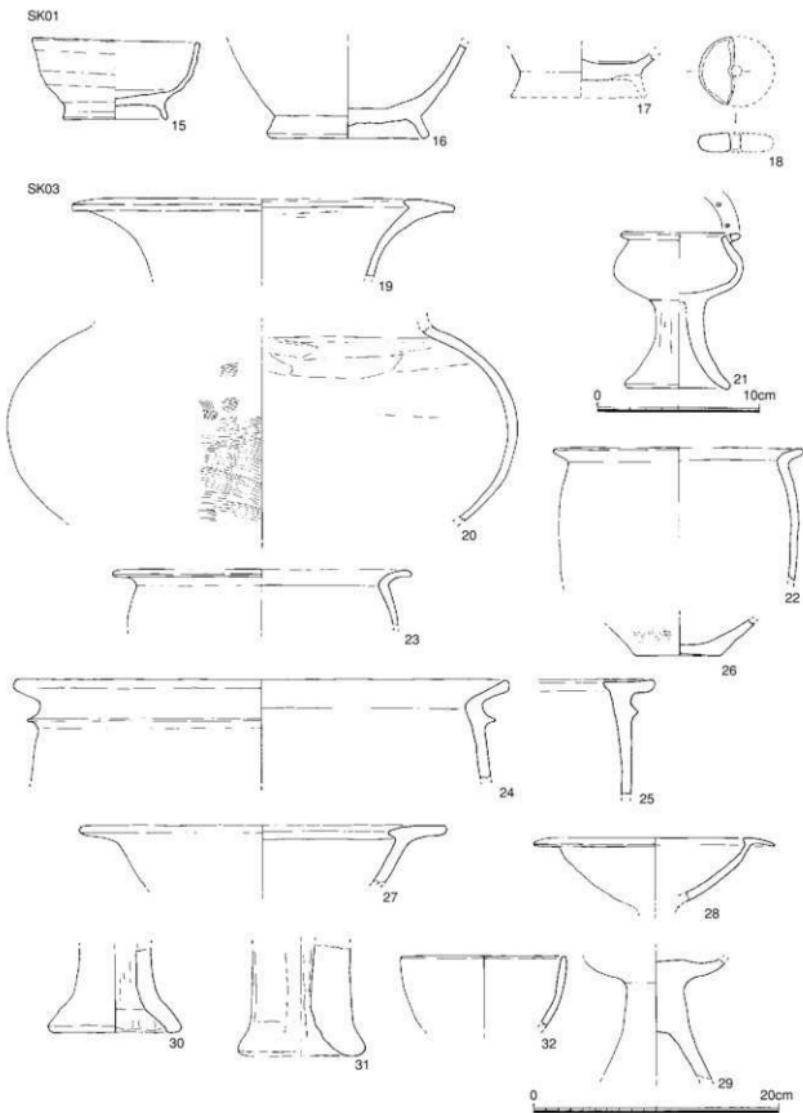


図31 SK01・03出土土器 (1/3・1/4)

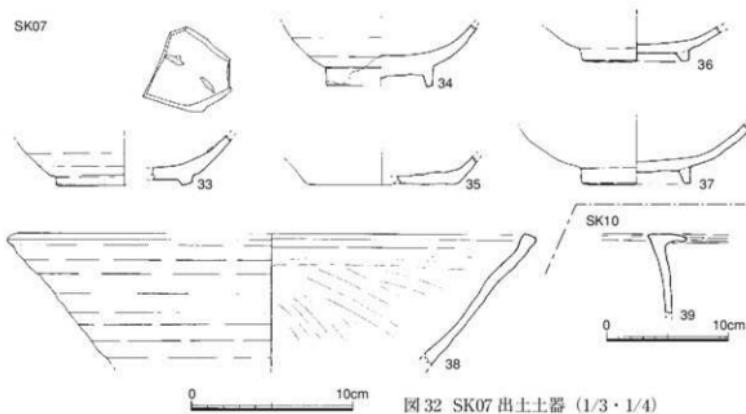


図32 SK07出土土器 (1/3・1/4)

SD06 (写真32)

調査区南端で検出した小溝。確認長2.7m、最大幅0.5m、深さ4cmを測る。埋土は暗灰褐色粘土で、黄白色粘土ブロック混入する。出土遺物は古墳時代頃の土師器・須恵器細片、鉄滓が数点出土。図示出来るものはない。

(2) 土坑 (SK)

土坑番号を付したものは12基。主なものを報告する。

SK01 (図30、写真37・38)

調査区西側で検出した隅丸長方形状の土坑。規模は長軸長1.67m、短軸幅1.35m、最大深さ0.25mを測る。埋土は黒褐色粘質土が主体で、上面には酸化鉄分が沈着する。

出土遺物 (図31、写真51) 弦生土器、古代の土師器・須恵器片と、鉄滓が多数出土。**15～17**は土師器の高台付椀。**15**は2/3片で、口径10.3cm、器高5.1cmを測る。底部には回転ヘラケズリ後、高台を貼付け後ナデ。体部はやや摩滅するが、調整は回転ヨコナデ。内面にはススが付着する。**16・17**は底部で外に開く高台が付く。**16**は1/4片で復元底径9.2cmを測る。**17**は底部で高台を欠損。いずれも器壁は摩滅し調整は不明。**16**の高台内は剥離する。色調は**16**は灰褐色から褐色、**17**は明褐色を呈し、胎土は**16**が2mm内外白色粒子を含み、**17**は3mm内外砂粒・金雲母粒子を多く含む。**18**は筋鉢車。1/2片で、直径4.6cm、厚さ1.2cm、孔径0.7cmを測る。表面は摩滅する。色調は明赤褐色を呈し、胎土は細砂粒を多く含む。

SK03 (図30、写真39～41)

SK01の東側で検出した平面やや丸味を持った長方形を呈す主軸をN-2°-Wに取る土坑。規模は上面で長軸長2.6m、短軸幅は中央部で0.83m、底面はほぼ長方形で長軸長2.27m、短軸幅0.31～0.32m、深さは1.2～1.3mを測る。壁面は木口部ではほぼ直立するが、側面では上面が崩落したのか、やや広がる。埋土は上層が灰褐色粘質土、下層は褐色粘土で粘性が強く軟質である。中間層あたりに10～30cm位の自然縫が流れ込んでいた。廃棄土坑と思われるが、形態的に古代のトイレ遺構に似る。

出土遺物 (図31、写真51) 弦生時代中期須玖II式頃の甕、壺、高坏などが多数出土。**19・20**は

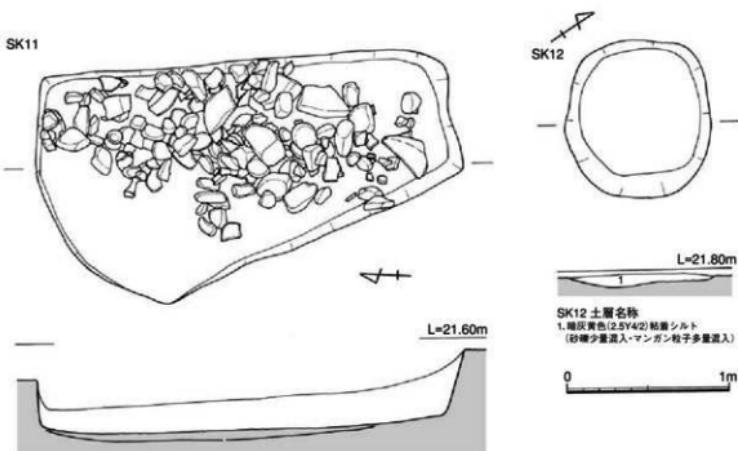


図33 SK11・12 (1/30)

壺。19は錫形口縁部1/8片。復元口径31.2cmを測る。調整はヨコナデ。丹塗りで色調は淡橙色を呈し、胎土は精良で5mm位の砂粒を含む。焼成は不良。20は偏球の胴部上半部1/2片。最大胴径41.6cmを測る。調整は、外面はやや摩滅するがハケ目で、上部はナデで平滑に仕上げる。内面は板状工具によるケズリに近いナデ。色調は内面オーリーブ黒色、外面は灰黄褐色を呈し、胎土は2mm内砂粒・金雲母粒子を含む。21は脚部が付くほぼ完形の小型壺。口径7.3cm、器高9.4cm、脚幅部径6.4cmを測る。口縁部には蓋を付けるための径25mmの孔が2個1対で付く。器壁は摩滅し調整は不明。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土に粗砂粒と赤色粒子を含む。焼成は不良。22～25は甕。22・23は「く」字状に外反する口縁で残存率は1/6片・1/9片で、復元口径20.4cm・24.2cmを測る。いずれも器壁は摩滅し調整は不明。色調は浅橙色・灰黄褐色を呈し、胎土は22は精良、23は粗砂粒を含む。焼成はいずれも不良。24・25は頸部に三角突帯を巡らす大型の甕口縁部片。24は1/7片で、復元口径40.0cmを測る。25は小片。いずれも器壁は摩滅し調整は不明。色調はいずれも鈍い黄橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。焼成も不良。26は壺か甕の底部。底径6.8cmを測る。調整は器壁の摩滅はあるが、外面ハケ目が残る。色調は灰黄褐色を呈し、胎土に粗砂粒を含む。焼成は不良。外底部に黒斑がある。27～29は高坏。27・28は錫形口縁を持つ坏口縁部の1/6片・1/10片で、復元口径30.0cm・19.6cmを測る。いずれも器壁は摩滅し調整は不明。色調は鈍い橙色・鈍い黄橙色を呈し、いずれも胎土は粗砂粒を含み、焼成は不良。29は脚部。器壁は摩滅し調整は不明。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土は砂粒・雲母粒子・赤色粒子を少量含む。焼成は不良。30・31は支脚か器台の底部。筒形で残存率は1/4片・2/3片である。30は復元底径11.0cm、31は10.4cmを測る。いずれも器壁は摩滅し調整は不明。色調は鈍い橙色、鈍い褐色を呈し、焼成は不良。32は鉢口縁部1/10片。復元口径13.4cmを測る。器壁は摩滅し調整は不明。色調は橙色を呈し、胎土は精良で、僅かに赤色粒子を含む。焼成は不明。20・26・30は下層出土。

SK04 (図30、写真43)

調査区西側で検出した平面不整形形状の浅い土坑。規模は長軸長1.36m、短軸幅1.04m、最大深さ

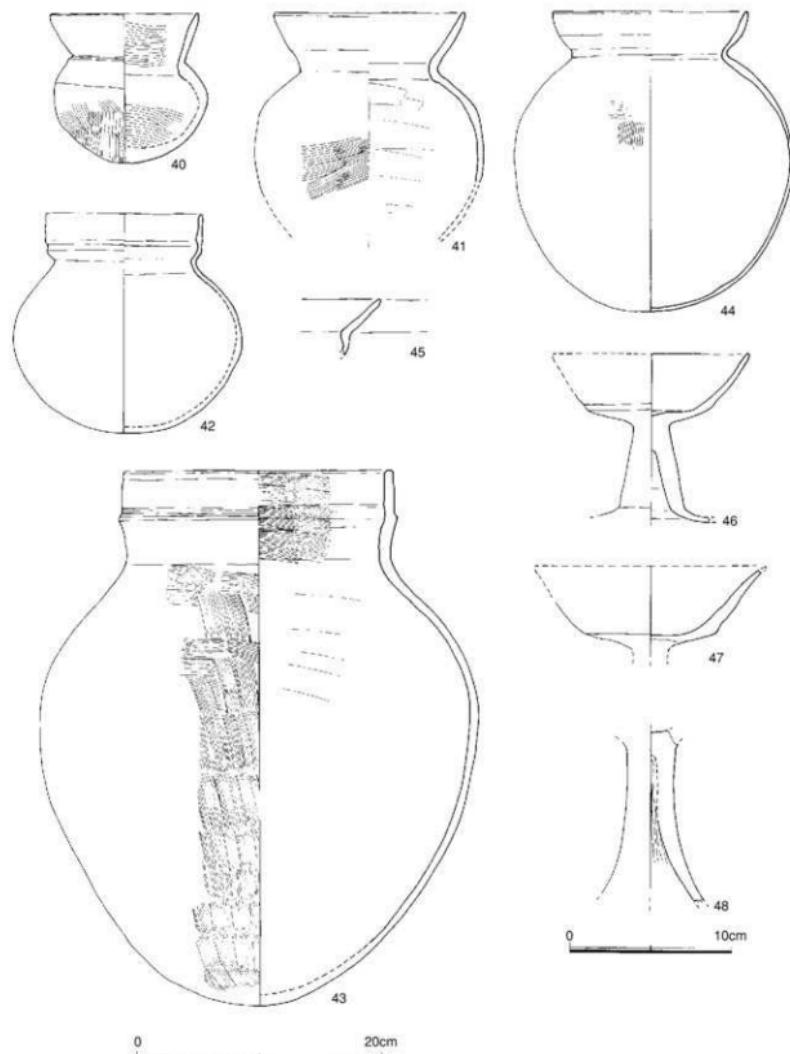


図34 SK11出土土器 (1/3・1/4)

5cmを測る。埋土は暗灰黄色粘土で酸化マンガン粒子を混入する。出土遺物は弥生土器、中世土師器の細片が少量出土。図示出来るものはない。

SK07 (図 30、写真 42・44)

調査区中央東側で検出した平面形状が不整梢円形を呈す土坑。規模は長軸長 1.43 m、短軸長 1.28 m、深さ 0.48 m を測る。二段掘りで南側は最大幅 0.4 m のテラスを持つ。最大長 0.4 m 程の自然礫が南から落込むような状況で検出された。埋土は暗灰黄褐色粘土と灰白色粘土が主体で、酸化鉄分が沈着している。礫石に混じって鉄滓も出土しており、製鉄に伴う廃棄土坑か。

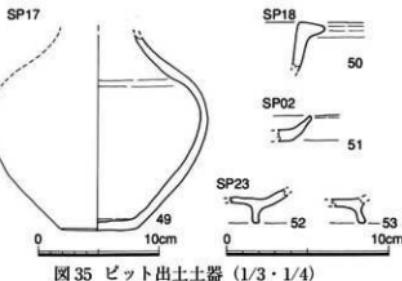


図 35 ピット出土土器 (1/3・1/4)

出土遺物 (図 32、写真 51) 弥生土器や古代から中世の土師器・瓦器、中国産越州窯系青磁、白磁などと鉄滓が出土。33 は越州窯系青磁碗底部 1/6 片。復元底径 8.4 cm を測る。見込みと高台疊付に目痕が残る。全面灰オーリーブ釉がかかるが、疊付は釉を搔き取る。胎土は精良で灰色を呈す。34 は白磁碗底部片。底径 6.5 cm を測る。高台はやや外に開くようにケズり出す。底径 6.5 cm を測る。灰色で不透明の釉が高台外面までかかるが、疊付から高台内は露胎。胎土は精良で、色調は灰白色を呈す。35 は土師器壺底部 1/4 片。器壁は摩滅し調整は不明であるが、外底部は回転糸切り。色調は褐灰色から明褐灰色を呈し、胎土は砂粒を含む。焼成は不良。36・37 は瓦器碗底部。底径 6.5 cm、6.7 cm を測る。調整は 36・37 共ナデ、37 はやや摩滅する。色調は 36 は灰色、37 は内面灰白色、外表面灰色

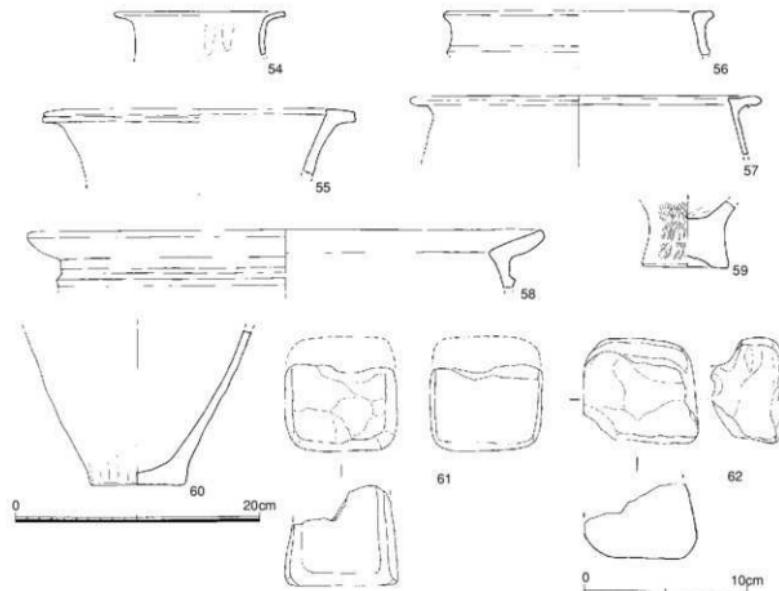


図 36 段落ち部出土土器 (1/3・1/4)

を呈し、胎土はいずれも精良。焼成も良い。38は東播系の須恵器の片口鉢。1/7片で、復元口径32.6cmを測る。外面回転ヨコナデ、内面は不定方向のナデ。色調は胎土に砂粒を含み、焼成不良。体部は灰色、口縁部外面は暗灰色を呈し、胎土は堅緻で、粗砂粒を含む。東播系中世須恵器編年第I期のもの。

SK10 (図30)

調査区北西側で検出した平面形状が不整梢円形を呈す土坑。規模は長軸長1.26m、短軸幅0.66m、深さ0.15mを測る。埋土は暗灰黄色粘土。弥生土器を図示するが、出土遺物から中世前半の時期で鉄滓なども含み、廃棄土坑か。

出土遺物(図32) 弥生土器、中世の土師器、瓦器片、鉄滓が少量出土。39は弥生土器の壺口縁部細片。中期須玖II式のもの。器壁は摩滅し調整は不明。色調は鈍い橙色を呈し、胎土は2mm程の砂粒を多く含む。

SK11 (図33、写真45~47)

調査区南東側境界地で検出した平面形状が不整長方形を呈す土坑。規模は長軸長2.65m、短軸幅1.43m、最大深さ0.6mを測る。埋土は上層が暗褐色粘質土、下層は黄橙色粘土である。底面より20cm上面で長さ10~30cm前後の自然礫が多数検出されたが、礫石の中には完形に復元できる古墳時代前期の土器が出土した。廃棄土坑であろう。

出土遺物(図34、写真51・52) 弥生土器、古墳時代前期の土師器が壺・壺・高杯などが出土。40~47は古墳時代前期後半の土師器。40~43は壺。40は小型丸底壺。完形品で口径8.9~9.1cm、器高9.2cmを測る。器壁はやや摩滅するが、調整は胴外面下半と内面はハケ目。色調は鈍い褐色を呈し、一部黒斑がある。胎土は1mm内外砂粒・金雲母を多く含む。41は壺に近い口縁が開く小型壺1/3片。復元口径11.6cmを測る。器壁はやや摩滅するが、調整は外面ナデとハケ目。内面は胴部ヘラケズリ。色調は橙色を呈し、胎土は2mm内外砂粒を多量混入。外面には黒斑がある。42は外米系の小型の二重口縁壺ではば完形。口径は9.4~9.6cm、器高13.55cmを測る。全体に器壁を薄く仕上げる作り。器壁は摩滅し調整は不明だが、胴部内面はヘラケズリか。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土は精良。43は大型の二重口縁壺。口径1/3を欠く以外ほぼ完存。口径は22.0cm、器高44.2cmを測る。器壁の摩滅は著しいが、調整は、外面は胴部がハケ目、口縁外面はヨコナデ、内面はハケ目、胴部内面はヘラケ

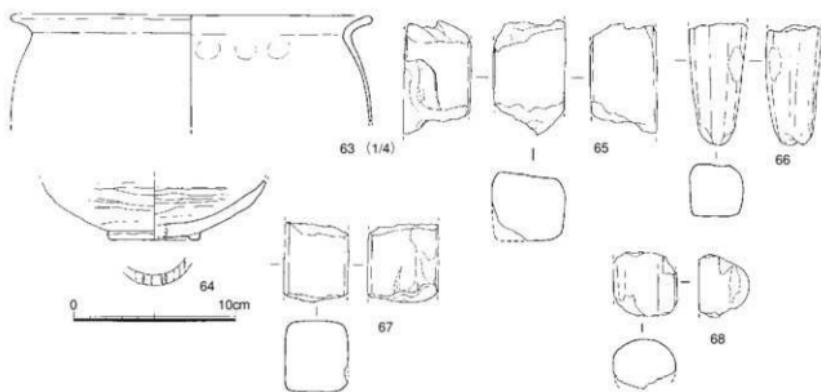


図37 遺構面出土土器 (1/4・1/3)

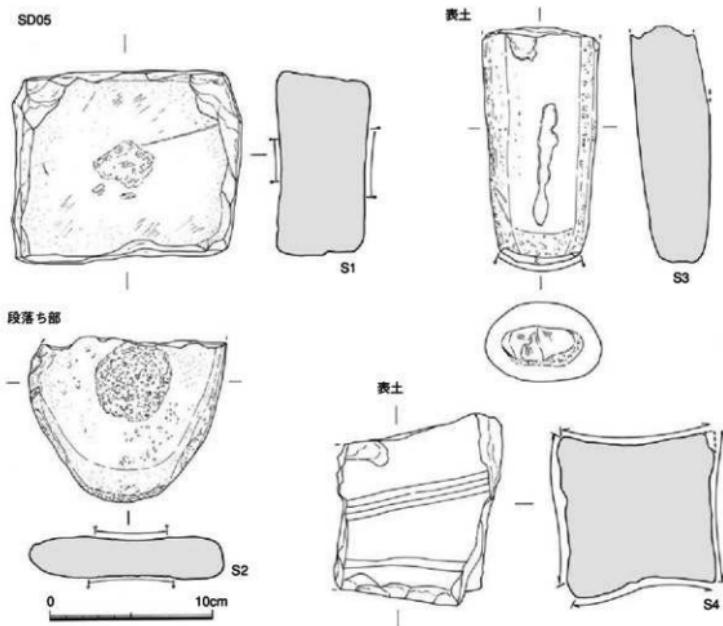


図38 各遺構出土石器（1/3）

ズリである。色調は鈍い橙色を呈し、外面には黒斑が2カ所ある。胎土は径2mm内外の砂粒を少量含む。
44は布留式の甕。遺存率は2/3程である。口径は12.1cm、器高18.4cmを測る。器壁は薄く、また器壁は摩滅し、調整は外面かすかにハケ目が残る。内面はヘラケズリと思われるが不明。色調は鈍い黄
橙色を呈し、胎土は1~2mm砂粒を多く含む。45は鉢口縁部小片。調整は摩滅し調整は不明。色調
は鈍い黄橙色を呈し、胎土は1mm内外砂粒と赤色粒子を含む。46~48は高坏。46は口縁部1/5と、
裾部欠損。口径は12cm、残存器高は10.5cmを測る。器壁は摩滅し調整は不明。脚部内面にはシボリ
痕が残る。47は坏部で口縁端部を欠損。復元口径14.2cmを測る。器壁がひどく調整は不明。色調は、
46は鈍い橙色、47は橙色を呈し、胎土は46が4mm内粗砂、赤色粒子を多く含む、47は精良で1mm
程の砂粒を少量含む。48は弥生土器の高杯脚部。器壁は摩滅し調整は不明。内面シボリ痕残る。色
調は橙色を呈し、胎土は2mm内砂粒を多く含む。

③ ピット出土遺物 (SP) (図35、写真48・52)

遺物が出土してピット番号を付したものは28基。埋土は黒褐色粘質土、暗褐色粘質土、灰褐色粘
質土の3種類があり、時期の差であろうか。遺物も弥生土器や中世の土師器が出土する。49はSP17
出土の弥生時代中期の袋状口縁壺胴部か。最大胴径18.0cm、残存高16.1cm以上を測る。器壁の摩減
し調整は不明。色調は橙色を呈し、胎土は1~3mmの砂粒を含む。50はSP18出土の甕口縁部細片。

器壁の摩滅はひどく調整は不明。色調は橙色を呈し、胎土は1mm内外砂粒多く含む。**51**はSP22出土。中世の土師器小皿細片。器壁は摩滅し調整は不明。色調は鈍い橙色を呈し、胎土は2mm内砂粒を少し含む。**52・53**はSP23出土。**52**は土師器椀高台部細片。**53**は黒色土器B類椀高台部細片。色調は浅黄橙色、黒色を呈し、胎土はいずれも精良。**52**は焼成不良。いずれも高台の形態から10世紀頃のものか。

④ 段落ち部出土遺物 (図28、写真49)

調査区南側SD05の南東側で検出した。SD05の東側からだらだらと下がり、深さは調査区壁で0.7m以上を測る。埋土は上層黒褐色粘質土、下層暗褐色粘質土である。

出土遺物 (図36・38、写真52) 弥生時代中期前半以降の土器がパンコンテナ2箱以上と鉄滓が出土している。**54～60**は弥生土器。**54・55**は壺。**54**は1/7片で、口縁が聞く形態。復元口径14.0cmを測る。**55**は動形口縁部1/7片で、口径25.6cmを測る。いずれも器壁は摩滅し調整は不明。色調は**54**は鈍い橙色、**55**は鈍い黄橙色を呈し、胎土はいずれも砂粒を多く含む。**56～58**は弥生時代中期初め～中頃の壺。**56**は口縁部1/7片。復元口径22.2cmを測る。頸部に一条の三角突帯が付く。器壁は摩滅し調整は不明。**57**は逆L字形の口縁1/10片、復元口径27.6cmを測る。**58**は大型の壺口縁部1/10片。復元口径42.2cmを測る。**56・57**は器壁が摩滅し調整は不明。**58**はヨコナデ。色調は、**56**は鈍い橙色、**57・58**は橙色を呈し、胎土はいずれも砂粒を多く含む。**59**は上げ底の底部。底径7.0cmを測る。外面調整はハケ目。**60**は壺の平底の底部。底径7.7cmを測る。外面は板ナデと思われるが摩滅し不明。色調は鈍い橙色、明褐色を呈し、胎土は、**60**は粗砂粒を多く含む。**61・62**は支脚。断面方形で底面では一辺6.9cm、7.1cmを測るが、上部は途中で欠損するが狹まる。器壁は摩滅し調整は不明、胎土は3mm内外砂粒多く含む。**60**は表面ピンク色を呈し、二次加熱を受けたのか。

S2は凹石片。表面は不整梢円形を呈す。長軸長10.15cm以上、短軸長12.2cm、厚味2.5cmを測る。敲打調整後磨て仕上げる。上下両面中央と下端には使用によるような窪みが残る。

⑤ 遺構面他出土遺物 (図37・38、写真52)

63は弥生時代中期後半の壺口縁部1/6片。復元口径29.6cmを測る。器壁は摩滅し調整は不明。色調は淡橙色を呈し、胎土に5mm内砂粒を含む。**64**は瓦器椀1/4片。底径5.6cmを測る。調整は体部内外面ヘラ研磨、外底部は回転糸切り、高台疊付には板状らしき圧痕が残る。色調は黒みを帯びた灰色を呈し、胎土は精良。**65～68**は脚部片。**65・66**は断面方形を呈し、**65**は一辺4.5×4.2cmを測る。調整はナデ。**66**は4.2×3.9cmを測る。調整はナデ。**67**は脚の先端部。残存長7.5cmを測る。断面は隅丸方形を呈す。外面の調整はナデ。先端は少し欠ける。**68**は残存長4cmで、断面梢円形を呈す。調整はナデ。色調は**65**は灰黄色、**66**は明褐色、**67**は黄灰色、**68**は灰黄色を呈し、胎土は**66～67**は砂粒を多く含む。

S3は磨製石斧の基部を転用した叩き石。全長14.6cmを測る。表面は摩滅し、風化が著しいが、敲打調整痕が残る。使用面は擦りで摩滅するが、敲打痕が残る。色調は灰白色を呈し、石材は頁岩か。**S4**は大型の砥石で、使用痕の溝が上面と左側面に残る。色調は灰黄褐色を呈し、石材は目の粗い砂岩。

第V章　まとめ

本章では吉武遺跡群第14次調査、大北遺跡群第1次調査のまとめを行なう。

吉武遺跡群第14次調査　堅穴住居跡、掘立柱建物などからなる集落跡を検出した。時期は出土遺物や重複関係から見て、弥生時代中期から8世紀中頃迄である。以下、各遺構毎に述べる。

柵と掘立柱建物については、出土遺物が少ないので時期の認定は難しいが、建物の主軸が東西方向を取るI群SB01・SB05と、南西から北東方向を取るII群SB02・SB03・SB04・SB06に大別出来る。I群については古墳時代の土器器、須恵器が僅かに出土し古墳時代後期頃である。II群は弥生土器片しか出土せず、またSB03・SB06のように柱間1×2間の梁間スパンが1間で広い、弥生時代に通常見られる建物形態を呈していることから、弥生時代中期の時期と考える。ただSB06は柱穴から土馬が出土していることから時期が下る可能性もある。2列の柵はSD04、SB05と方向も同じであり古墳時代後期頃である。北側の第6次調査区では柱の続きがなく、この調査区内で終わる。古墳時代後期には既に段造成されていたのであろう。

堅穴住居跡は2棟検出した。床面出土の土器がなく断定は出来ないが遺物が弥生時代中期後半から末頃と考える。ただ北側の調査区では同方向の堅穴住居SC13があり、古墳時代後期の時期であることからSC01は古墳時代後期に下る可能性も有す。土坑はSK10が段落ち部の包含層整地土・土器群下から出土し、須玖II式期の土器が出土していることから中期後半であろう。弥生時代の土坑は他にSK05がある。

溝はSD03・SD04以外は農地の段造成に伴うものであり、時期は新しい。最後に段落ち部の包含層整地面の時期である。遺物は下層ほど古く弥生時代前期末頃のものが出土しているが、上面は古代8世紀頃の須恵器が出土しており、この時期に谷部が最終的に埋まり造成されたと考える。

以上をまとめると、遺構時期は弥生時代中期の時期の遺構SB03～04・SB06、SC01・SC02、SK10と、古墳時代後期の遺構SB01・SB05、SA01・SA02、SD04に分類出来る。

大北遺跡群第1次調査　主な検出遺構は土坑と溝であった。時期は出土遺物から弥生時代中期I期、古墳時代前期II期、古代後半III期、中世前半IV期の4時期に分かれる。

I期は土坑SK03とSP17が該当する。Sk03は中期後半から末頃、SP17も同時期であろう。

II期はSK11が該当する。古墳時代前期後半の時期である。

III期はSK01が該当する。横田賢次郎氏による大宰府編年C-2期の9世紀後半に該当する。

IV期は溝SD02～05、SK07などが該当する。SK07は越州窯系青磁などを含むが、白磁碗や瓦器楕の形態、東播系中世須恵器の出土から11世紀後半から12世紀である。02～05は同安窯系青磁や竜泉窯系青磁、口禿の白磁などから12～14世紀初め頃迄である。溝内からは多量の鉄滓が出土しており、調査では製鉄遺構は確認出来なかったものの、周辺で製鉄や鍛冶を行なっていたと考える。南側集落内存在する都地域関連の遺構については、今回の調査では検出出来なかった。ただ古い地形図を見ると都地域外側にも曲輪と考えることが出来るような地形も確認出来、堀と土塁で囲まれた曲輪の外部にも曲輪が形成されていたことが予想される。



写真 27 大北遺跡群遠景（北東から）



写真 28 第1次調査区全景（北東から）



写真 29 調査区北側（東から）



写真 30 調査区南側（東から）



写真31 SD05（東から）



写真32 SD06（東から）

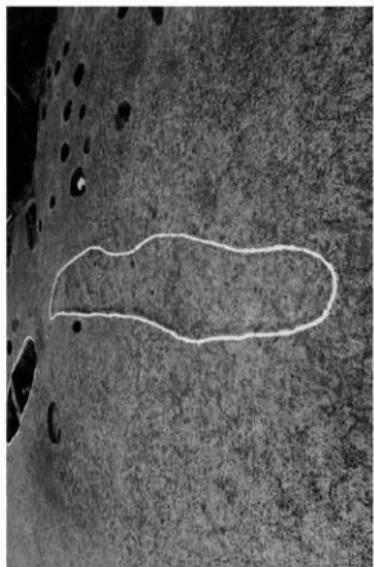


写真33 SD01 (東から)

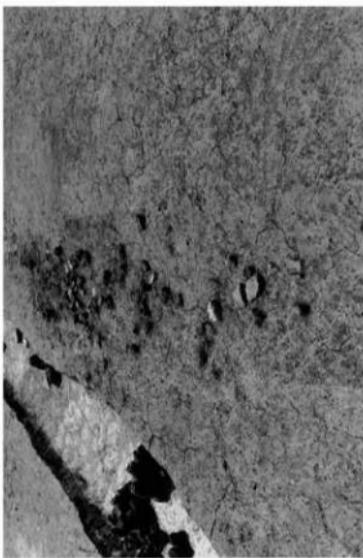


写真34 SD03 (北西から)

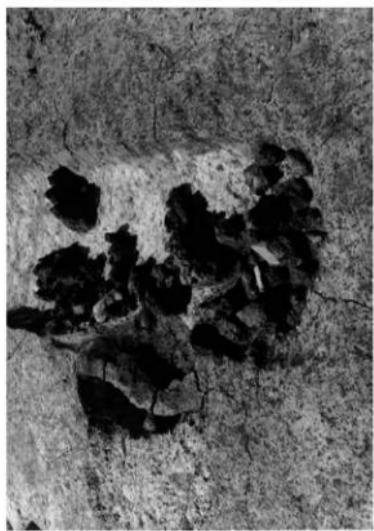


写真35 SD04 銀錠出土状況 (西から)



写真36 SD05 銀石検出状況



写真37 SK01（北西から）

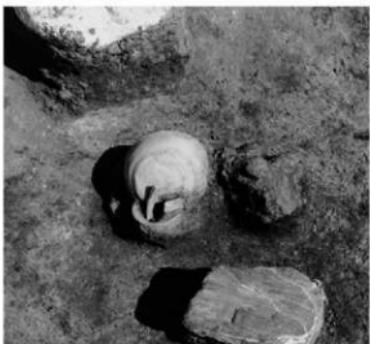


写真38 同 遺物出土状況



写真39 SK03 碠検出状況（北から）



写真40 同 完掘（北から）



写真41 遺物出土状況

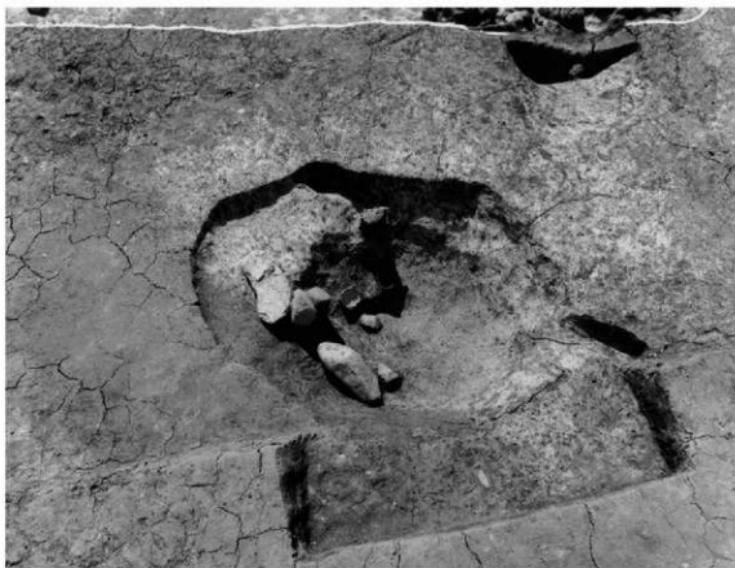


写真42 SK07（東から）



写真43 SK04（北から）



写真44 SK07 遺物出土状況（北から）

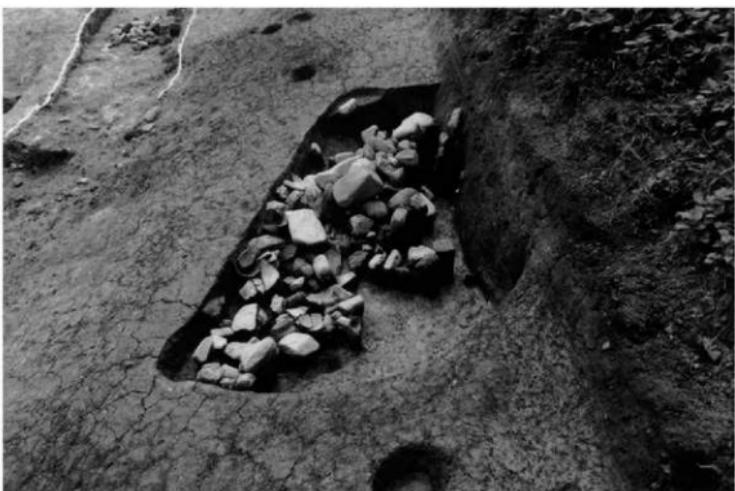


写真45 SK11（西から）



46



48

写真46 同 遺物出土状況①

写真47 同 遺物出土状況②

写真48 SP7 遺物出土状況



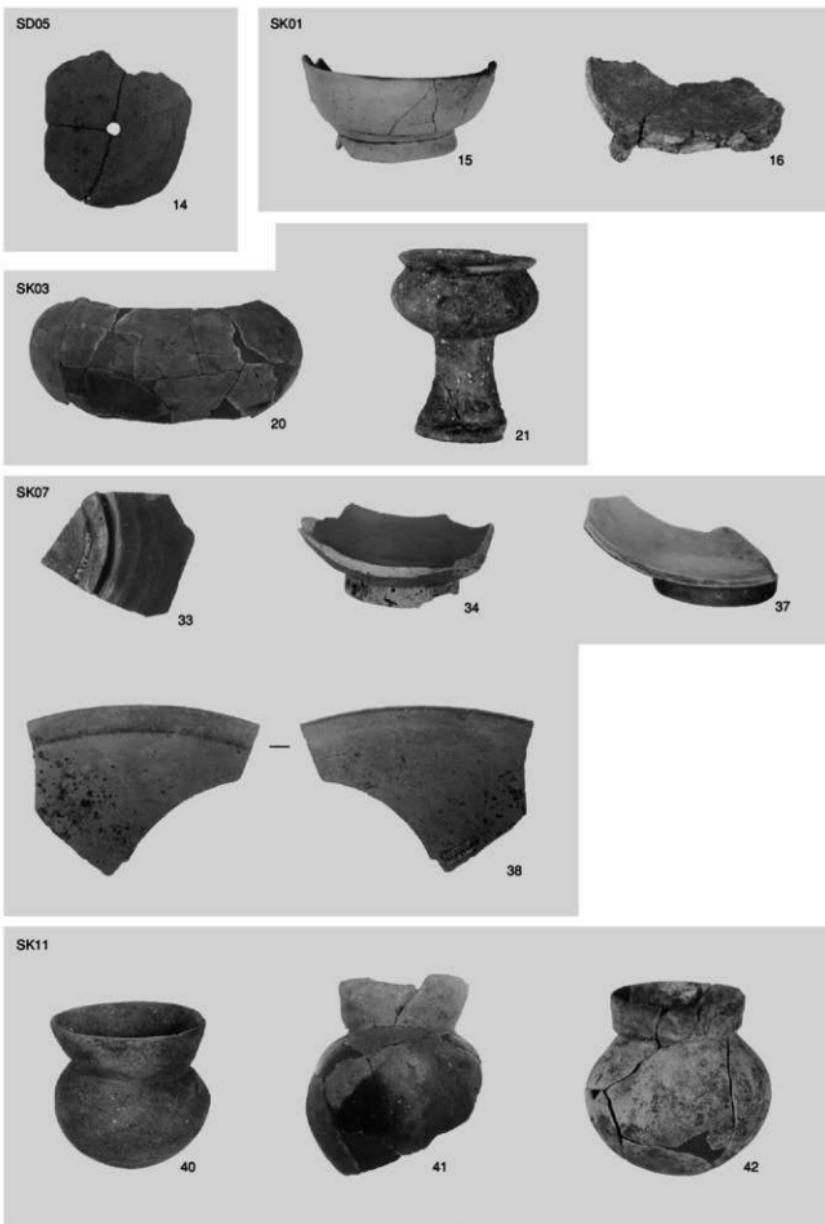
47



写真 49 調査区段落ち部南東壁土層（西から）



写真 50 20年後の調査区の状況（東から）



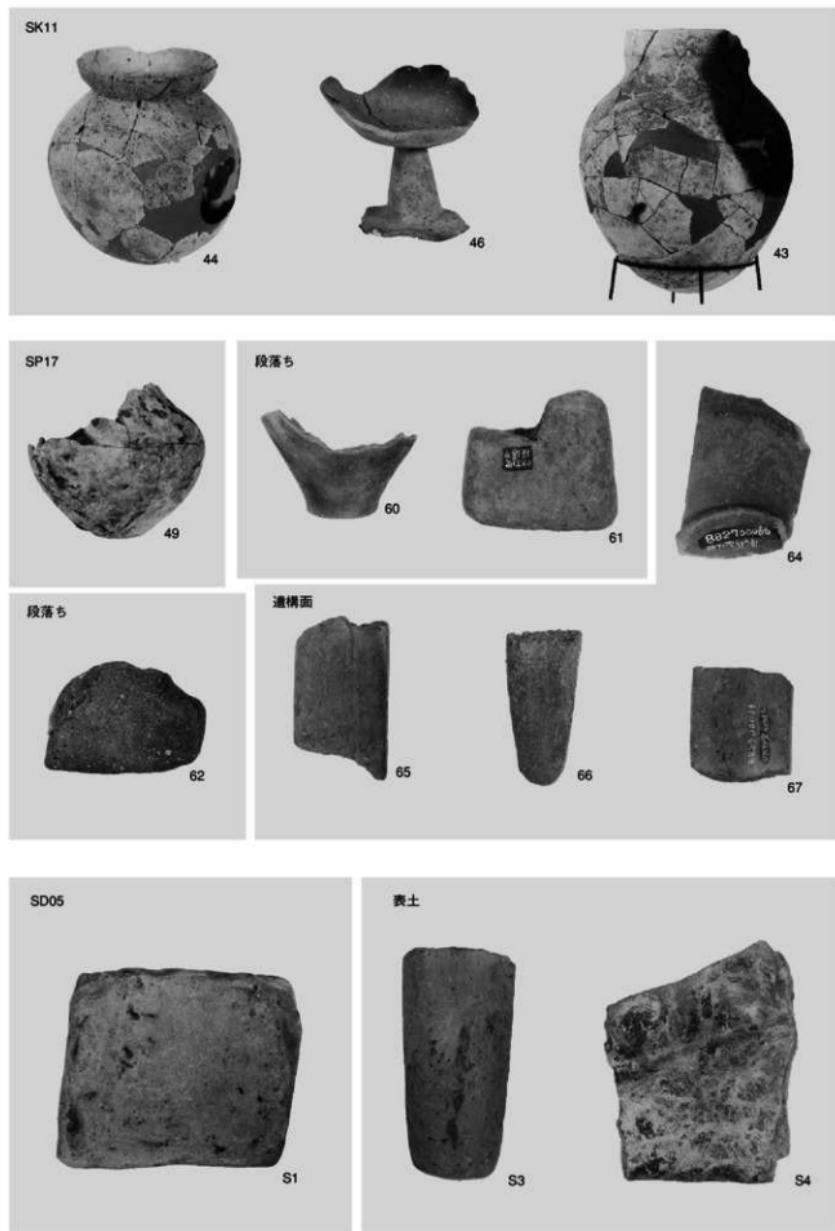


写真 52 各遺構出土遺物②（縮尺不統一）

報告書抄録

ふりがな		よしたけ いせき ぐん						
書名		吉武遺跡群 21						
副書名		-金武園場整備事業に伴う吉武遺跡群第14次調査、大北遺跡第1次調査報告-						
卷次		21						
シリーズ名		福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号		1017						
編著者名		山崎龍雄						
編集機関		福岡市教育委員会						
所在地		〒810-8621福岡市中央区天神1丁目8-1			TEL092-711-4667			
発行年月日		西暦2008年3月17日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
よしたけいせき ぐんだいじゅう よじょううき 吉武遺跡群 第14次調査	ふくおかしにしく述べあざよしたけ あがたかぎ 福岡市西区大字吉武 字高木	40132	0405	33°32'12"	130°19'10"	19880725 ~19880916	724	園場整備
おおきいせき ぐんだいじゅう よじょううき 大北遺跡群 第1次調査	ふくおかしにしく述べあざよしたけ あがねおきた 福岡市西区大字金武 字大北	40132	0418	33°32'10"	130°19'10"	19880725 ~19880916	470	園場整備
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
吉武遺跡群 第14次調査	集落	弥生時代・古墳時代	弥生時代 - 積穴住居跡 + 土坑 + 柱穴・古墳時代 - 挖立柱建 物 + 溝 + 土坑 + 柱穴	弥生時代 - 弥生土器 + 石器 + 石製品・古墳時 代 - 土師器 + 須恵器 + 土 馬 / 古代 - 須恵器				
大北遺跡群 第1次調査	集落	弥生時代・古墳時代、 中世	弥生時代 - 土坑 + 柱穴 / 古墳 時代 - 土坑 / 古代 - 土坑 / 中世 - 溝 + 土坑 + 柱穴	弥生時代 - 弥生土器 + 石器 / 古墳時代 - 土師 器 + 須恵器 / 古代 - 土 師器 / 中世 - 土師器 + 中国産陶器器				
要約	吉武遺跡群第14次調査　吉武遺跡群南縁部の調査。弥生時代前期後半から古代にかけての時期の遺構と遺物を検出した。堅穴住居跡や掘立柱建物などを検出ましたが、遺構は南側の崖面で切られており、本来の遺跡が更に南側に広がっていたと思われる。							
大北遺跡群第1次調査　大北遺跡群での初めての調査。遺跡の時期は弥生時代中期から中世前期迄であり、吉武遺跡群第14次調査よりは若干新しい時期まで遺構が確認出来た。遺跡の性格も集落で弥生時代から古墳時代は谷を挟むものの、同じ集団の集落であったと思われる。古代から中世の土坑や溝には鉢形が多く発見されており、近くで製鉄・鍛冶遺構が存在する可能性がある。								

吉武遺跡群 21

-金武園場整備事業に伴う吉武遺跡群第14次調査、
大北遺跡第1次調査報告-

2008年3月17日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 金丸印刷株式会社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-46-1